



「堺・南大阪地域学」シリーズ 別刊2 「大学」を  
学ぶ：大阪府立大学史への誘い

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山東, 功 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/00017028">http://hdl.handle.net/10466/00017028</a>

「堺・南大阪地域学」シリーズ 別刊 2

# 「大学」を学ぶ

—大阪府立大学史への誘い—

山 東 功

大阪公立大学共同出版会

# 「大学」を学ぶ

## －大阪府立大学史への誘い－

山 東 功

---

はじめに	3
<hr/>	
第1章 高等教育とは何か	5
1. 高等教育機関と大学	
2. 大学制度の史的展開	
<hr/>	
第2章 大学史の意義	12
1. 大学観の変遷と大学史	
2. 大学の創設と理念	
3. 学風・校風をめぐって	
<hr/>	
第3章 大阪府立大学史への誘い	21
1. 公立大学と大学史	
2. 産業教育史と社会背景	
3. 女子教育と公立女子大学	
4. 福祉・医療制度の展開と大学	
<hr/>	
第4章 大学通史（1）浪速大学に至るまで	29
1. 農業系専門学校	
2. 工業専門学校	

<b>第5章 大学通史（2）浪速大学から大阪府立大学へ</b>	<b>38</b>
1. 浪速大学設置と大阪府立大学への改称	
2. 工学部の流れ	
3. 農学部の流れ	
4. 教育学部の設置と廃止	
5. 経済学部の設置	
6. 教養部から総合科学部へ	
<b>第6章 大学通史（3）大阪女子大学・大阪社会事業短期大学</b>	<b>49</b>
1. 大阪府女子専門学校	
2. 大阪女子大学	
3. 大阪社会事業短期大学	
4. 大阪府立大学社会福祉学部の設置	
<b>第7章 大学通史（4）大阪府立看護大学・研究所</b>	<b>55</b>
1. 大阪府立看護短期大学・大阪府立看護大学	
2. 大阪府立大学附属研究所・先端科学研究所	
<b>第8章 大阪府立大学のこれから</b>	<b>59</b>
1. 公立大学法人大阪府立大学	
2. 大学史に望まれるもの	
3. 大学文化遺産の構想	
<b>おわりに</b>	<b>66</b>
<b>参考文献</b>	<b>67</b>
<b>大阪府立大学の沿革</b>	<b>71</b>

## はじめに

「大学」とは何か。こうした単純な問いについては、例えば、大学で学ぶ者にとって、また大学を職場とする者にとって、さらには地域社会で大学を目にする者にとって、というようにそれぞれに応じた答え方というものが存在する。そして、おそらくその答えはどれも間違っていないだろう。教育機関として、研究機関として、あるいは職場として。地域の憩いの場というのものもあるに違いない。そういった大学に対するまなざしの総体が、ある意味において、大学のあり方を表していると言えるのである。

ところが、そうした大学に対するまなざしなどは、日々の生活の中で特に意識することがない。大学とは何か、という問いも、無理に設定した問いかけだとシニカルに捉えることもできよう。実際、自らの研究にとって大学などは単なる場所提供の役割しか果たさないと見る向きも存在するし、大学で学ぶことも日常生活の一部であって全てではない以上、特に意識する必要もない、と考える学生も多いことだろう。

しかしながら、その反面、大学が自らのアイデンティティと深く関係している場面に遭遇してしまい、時には驚愕してしまうこともあるのではなかろうか。「校風」や「スクールカラー」という言葉の意味は、人生の多感な時期を大学で過ごした学生にとっては案外重いものがある。自分ではそう思っていないにせよ、世間ではそのように見られているという構図に「大学」という場はうまく嵌り込むのである。真面目な〇〇大生、おしゃれな△△大生、というステレオタイプが妙に信憑性をもつのは、いったいどのような理由からなのか。そういうところからも「大学」とは何かを考えることができるのであり、あなたが無理に設定した問いかけとも言い切れないのではなかろうか。

本書は、こうした「大学」とは何かという問いかけに対し、大学の沿革（歴史）に注目することで、大学のあり方について考察する

契機となるよう執筆されたものである。大学史を通じて大学を知る、という行為は、一見迂遠な作業にも思えるだろうが、日々の大学生活そのものが大学の歴史を形成しているという意味で、大学史はリアルな大学生活そのものであるとも言える。つまり、歴史という遠い昔の話としてではなく、現実に今を生きる者にとっての足元を見据える作業として、大学史を捉えてみたいのである。本書の性格上、大阪府立大学史の記述が中心となっているが、こうした試みを近隣の大学や興味のある大学に広げていけば、いわば大学史を通したネットワークも形成できるだろうし、学生を中心とするサークル活動や地域ボランティア活動などへと展望が広がるかもしれない。大学史はいわば一つの可能性なのである。

大阪府立大学史に関する調査研究は、南努大阪府立大学学長の指定により2008（平成20）年4月に設置されたバーチャル研究所の一つ、大学史編纂研究所で行われている。設置に際しては、奥野武俊理事、中西繁光理事からも強いご支援を頂いた。現在は諸般の事情から十分な活動へと展開できていないが、将来は体制の整備などを受けて本格的な大学史編纂事業などに着手できればと考えている。

本書は大阪府立大学における大学史編纂事業の第一歩であるとともに、大学史のあり方に対する一つの試みと言える。読者各位には、忌憚ないご意見をお願い申し上げる次第である。

## 第1章 高等教育とは何か

本章では、大学とは何かを考察するにあたり、大学に代表される高等教育機関の意味について概説し、大学史を学ぶにあたって必要な知識の整理を行う。具体的には、日本における大学制度発達の歴史を概観する。

### 1. 高等教育機関と大学

高等教育機関としての大学 大学とは教育機関の一つである。ただし大学を「最高学府」と表現することもあるように、教育制度的には初等・中等教育の上にある高等教育機関として位置付けられている。

世界史的な観点からすれば、エジプトのカイロに設立されたアル・アズハル学院（988年）や、英語のuniversity（ユニバーシティ）の語源でもあるラテン語のuniversitasにあたる、イタリアのボローニャに設立されたAlma mater studiorum（1088年、現在のボローニャ大学）などが最古の大学の例と言える。今日の大学の起源としては、このボローニャ大学を指すことが多く、西ヨーロッパではその後、オックスフォード大学（1209年）、パリ大学（1275年）へと続いていく。こうした中世の「大学」から今日の大学に至る変遷は、極めて興味深い教育史のテーマの一つと言えよう。

いわゆる近代的総合大学の嚆矢として有名なのは、1810年に設立されたドイツのベルリン大学（現在のベルリン・フンボルト大学）である。創立者であるフンボルトや初代学長であったフィヒテらは大学の理念について浩瀚な議論を展開しており、ある意味において、近代における大学のあり方を決定付けたとも言える。大学に対する「良き伝統」といったイメージが存在するならば、それはドイツ観念論の影響下にあったベルリン大学のような大学のあり方を想定している場合が多い。

20世紀になり高等教育機関への進学が世界的にも広がっていく中で、大学の大衆化などが叫ばれ始めるようになった。また、産業構

造の転換とともに大学における研究のあり方も、大きな変化がもたらされるようになった。こうした大学のあり方を最も顕著に示しているのが、アメリカの大学であるだろう。現在のアメリカの大学制度は、リベラルアーツカレッジと、総合大学、専門（単科）大学の別に分かれているが、さらに公立（コミュニティーカレッジ〈2年制公立大学〉を含む）と私立との差を含めて、多様な大学のあり方を示している。その意味で、高等教育機関としての大学を単一的なイメージで把握することは極めて困難である。

「21世紀に向けての高等教育世界宣言」 しかしながら、大学において研究と教育が中心的な機能を担っていることは間違いない。そして、この研究と教育に対する責任所在と社会貢献のあり方が、大学にとってどうあるべきかが問われている状況にあると言えるのである。このことは以下に挙げる、ユネスコ（UNESCO）高等教育国際会議での「21世紀に向けての高等教育世界宣言（World Declaration on Higher Education for the Twenty-First Century: Vision and Action）」（1998年パリで採択）において示された、高等教育の使命と機能や展望、今後の行動に関する条項からも明らかである（訳文は日本科学者会議・東京高等教育研究所編（1999）に拠った）。

#### 高等教育の使命と役割

第1条 教育と養成および研究をおこなう使命

第2条 倫理的役割、自治、責任、および期待される役割

#### 高等教育の新たな展望の形成

第3条 機会均等

第4条 女性の参加の拡大と役割の推進

第5条 自然科学、芸術、人文科学における研究を通じた知識の推進とその成果の普及

第6条 適切性に基づく長期的な方向づけ

第7条 労働の世界との協力の強化、および社会のニーズの分析と予測



第8条 機会均等を増進するための多様化

第9条 革新的教育方法・批判的思考と創造性

第10条 主要な当事者としての高等教育の教職員と学生

展望から行動へ

第11条 質的な評価

第12条 技術の可能性と課題

第13条 高等教育の管理および財政の強化

第14条 公共サービスとしての高等教育の財政

第15条 国境および大陸を越えての知識と技術の共有

第16条 「頭脳流出」から「頭脳流入」へ

第17条 共同関係と協力

この宣言からもうかがえるように、高等教育機関が社会に果たす役割という点が今後ますます重視されていくことは間違いない。したがって、こうした社会性の観点から大学とは何かを見ていく必要があるだろう。

日本の高等教育機関 現在の日本における高等教育機関の学校教育法上の位置付けは、高等学校、中等教育学校などの後期中等教育に続く教育機関に該当する。具体的には以下の学校が該当し、それぞれ学士、準学士等の学位授与や専門士等の称号授与がなされている。

大学（学士）

短期大学・高等専門学校（短期大学士・準学士）

大学校（学士〈学位取得が可能な場合〉）

専修学校専門課程（専門士、高度専門士）

ただし、大学校と専修学校専門課程については、文部科学省の定めによる一定の水準を満たしたものに限られており、すべての学校が高等教育機関に該当するわけではない。例えば、警察大学校や税務大学校等は、公務員等の研修施設学校であり、高等教育機関とは

みなされない。一方、防衛大学校や気象大学校等は、学士の学位授与が認められている高等教育機関である。また、専修学校専門課程等で授与される専門士や高度専門士の称号は国内通用のもので、学位とは異なる点に注意する必要がある。

ただし、ここで挙げた学校等はいくまでも学校教育法の規定に従ったものであり、例えば日本国内における海外の大学や文部科学省管轄外の学校（いわゆる「非一条校」）はこれに含まれていない。また、現行学校教育法施行以前にも高等教育機関は存在していたわけであり、大学を狭義に捉えるだけではある種の誤解が生じるおそれもある。そこで、日本における大学制度の発達について軽く概観しておくことにしたい。

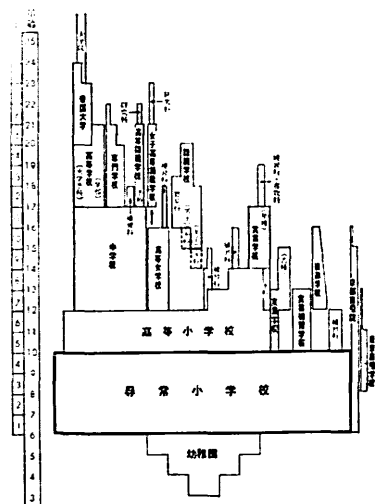
## 2. 大学制度の史的展開

**近代日本の大学制度** 日本における大学という名の教育機関が最初に設立されたのは、律令制度下の「大学寮」であるが、こうした近代以前の教育制度と今日の大学とを比較するのは少々困難である。ただし、私立大学の中には、近世の僧侶養成学校等をカレッジとみなすことで、同一の系譜に連ねている場合も多い。

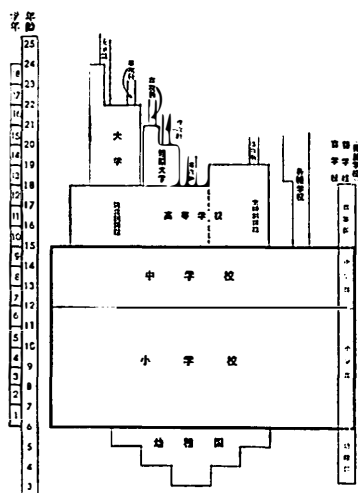
日本における近代的な大学制度は、1886（明治19）年の帝国大学令による帝国大学設置に始まると言ってよい。この帝国大学は1897（明治30）年に京都にも設置されたことから東京帝国大学と改称されるが、以後、東京、京都、東北、九州、北海道、京城、台北、大阪、名古屋の9帝国大学を頂点とする高等教育機関が整備されるに至ったのである。

大正期になると、産業界から高度の専門的な人材を求める動きが大いに高まった。さらに、私立学校や専門学校側からも大学としての拡充を求める動きが活発となり、1918（大正7）年に大学令が制定され、帝国大学以外も大学として認められることになった。これにより、慶応義塾大学、早稲田大学、國學院大学、同志社大学といった私学が大学に昇格し、府立大阪医科大学（後に大阪帝国大学へ移

管)や東京商科大学(現在の一橋大学)などの大学が設置された。また同年制定の改正高等学校令によって、実質的には帝国大学予科としての役割を担っていた高等学校(旧制)も順次整備されることになり、高等教育機関としての充実が図られた。これらの高等学校は、戦後の教育改革により新制大学の教養課程として再出発することになる。ちなみに、新制大学以前における大阪府下の大学は、大阪帝国大学(戦後、大阪大学に改称)の他に、関西大学、大阪商科大学(現在の大阪市立大学)、大阪理工科大学(現在の近畿大学)、大阪医科大学、大阪歯科大学などが設置されていた。



【図1】1900(明治33)年当時の学校系統図



【図2】学校教育法による学校系統図  
(文部省編(1972)による)

新制大学の発足 戦後、GHQ(実際は米国教育使節団)の勧告による教育制度の改革を受けて、1947(昭和22)年には学校教育法が施行された。さらに1949(昭和24)年には学制改革が行われ、いわゆる6・3・3制へと移行し、大学についても、後述する専門学校等の大学昇格などを含む大学一元化が導入された。この改革により大阪府下には、大阪大学、大阪外国語大学、大阪学芸大学(以上国立大学)、

浪速大学、大阪女子大学、大阪市立大学（以上公立大学）等の国立大学が設置されることになった。

これらの大学も後に統合等の影響を受け、現在では大阪大学、大阪教育大学、大阪府立大学、大阪市立大学の4大学となっている。

**旧制専門学校** 戦前における高等教育機関は、大学の他に専門学校が多く存在した。これらは1899（明治32）年制定の実業学校令や1903（明治36）年制定の専門学校令（実業学校令の改正）によって制度化されていたもので、例えば1916（大正5）年当時の専門学校、実業専門学校数は90校に及び、生徒数も約42,000人（内女子約1,600人）を数えていた。

これらの専門学校の中には先述のように大学への昇格を果たしたもののみられるが、ともあれ、戦前では高等教育機関のあり方が大学、高等学校、専門学校というように複数存在していた実態がうかがえよう。この他、戦前の高等教育機関には、陸軍士官学校、海軍兵学校などの陸軍省、海軍省管轄学校も含まれる。

**戦時下の改編** 1943（昭和18）年に専門学校令、師範教育令が改正され、それまでの実業専門学校と専門学校との区別が廃止され、さらに師範学校が専門学校へ昇格されることになった。このことから戦時下の師範学校についても高等教育機関に含まれることになる。

戦時下は軍備増強、食糧増産との関連から産業教育への傾斜に拍車がかかり、全国的にみても多くの工業系、農業系専門学校が新設された。ちなみに、戦時中に存在した大阪府下の工業専門学校については、後述する大阪府立大学の前身機関を除くと、大阪市立都島工業専門学校（現在の大阪市立大学）や摂南工業専門学校（現在の大阪工業大学、摂南大学）、関西工業専門学校（現在の関西大学）などがある。

**高等教育史としての「大学」史** 以上のことから、日本における高等教育機関の史的展開をみていく場合、大学（旧制、新制）の他には、専門学校（旧制）、師範学校（高等師範学校、青年師範学校）、陸軍士官学校、海軍兵学校といった諸学校を含めていくことが適切

である。本書で言う「大学史」は、上記の諸学校を含めた記述を中心に行うことにしたい。

## 第2章 大学史の意義

本章では、大学史の意味とその意義について考察を行う。具体的には、大学史を顧みることはどのような意味をもつのか、また大学史からどのような大学の特質を見出すことが可能なのかという点について、諸例をもとに検討を試みる。

### 1. 大学観の変遷と大学史

大学史をめぐって 日本における大学史の編纂は1907（明治40）年の『慶応義塾五十年史』が最初である。以後、本格的な大学史が各高等教育機関で編纂されることになったが、戦前の場合、それらの編纂スタイルにはある種の傾向が存在していた。寺崎昌男氏はこの点について、「1. 口承を中心にした記録史、2. 歴史家としてのディシプリンがあまり反映されていないタイプ、3. 記念事業と日本史学のあるディシプリンとが結びついた場合」の3類型を挙げている（寺崎他編（1999）による）。ここで歴史家としてのディシプリンがあまり反映されていないタイプというのは、例えば同窓生や事務局が中心となって編纂したために、教育や学問の歴史という観点が希薄となったものを指す。また、日本史学のあるディシプリンとは、史料中心主義による膨大な史料を掲載した史料集型の大学史や、あるいは戦前において顕著であった皇国史観の影響を多分に受けた大学史などを指している。

戦後、大学史は協業形式による編纂が多くみられるようになり、ある特定の史観に拠ったものなどはほとんど見受けられなくなった。また宗教系大学などの場合、日本史や教育史のみならず、宗教史や教団史などの知見も盛り込まれた大学史が編纂されるようになってきている。こうした傾向について寺崎氏は「大学沿革史というのは、そもそも、異なるディシプリン間の総合史であるべきだと思うのです」（前掲書）と述べ、積極的に評価している。実際、極めて専門的な研究内容を擁する高等教育機関の全容を、個人で包括的に記述す

ることなど不可能であろう。

大学観の変遷 そこで重要となってくるのが、大学史における「大学」の位置とその意味である。大学史がただ年表のように叙述した内容で十分であるとするならば、それは大学がそのような展開しかなされていなかったと認識されたからに他ならない。

そもそも大学とはいかなる機関であるのか。また、いかなる機関であるべきなのか。この問いが現在の大学の状況に対して投げかけられたとするならば、相応の答えをとりあえず出すこともできるだろう。しかしながら、同様の問いが未来において発せられた場合、その時も同じ答えであるという保証はどこにもない。逆に、過去において問いが発せられたのならば、その答えが今日のものとは異なっている場合も考えられよう。例えば戦前における帝国大学の場合、1886（明治19）年制定の帝国大学令第1条では「帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トス」とあったように、「国家ノ須要」というのが重要な意味をもっていた。つまり、大学は誰にとって、何のために存在するのか、という素朴な問いについてですら、時代状況と不可分でない場合もあり得るのである。このことは、世界史的観点から見ても、中世ヨーロッパにおける大学のあり方と、近代国家における大学のあり方との相違を垣間みただけでも明らかであろう。

大学史＝大学観の変遷史 それだけに大学史とは、大学という高等教育機関に対して、どのようなまなざしが向けられていたのか、ということ相対化する働きをもつことにもなるのである。つまり、大学史は大学をどのように捉えるのかという、大学観の変遷史としての特性をもつのである。

また、この大学観の変遷史という点は、大学の法制度上の位置付けとも関係している。国立大学は2003（平成15）年以降、国立大学法人法に基づき、法人化を果たしており、公立大学についても地方独立行政法人法によって、2005（平成17）年の大阪府立大学を最初として、大阪市立大学や京都府立大学といった公立大学の多くが法

人化を果たしている。こうした法人化が、大学の自律的な運営を促すものであるとするならば、今日では大学において「経営」の観点が重要視されてきたことを意味している。また2006（平成18）年の教育基本法改正によって「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」（第7条）と明文化されることになったが、ここでは大学における「社会貢献」の視点が明示されている。これらのことから今日の大学では、教育・研究とともに「経営」や「社会貢献」の観点が重要視されていることがわかるのだが、これらの事実を史的に提示するものがまさに「大学史」なのである。

## 2. 大学の創設と理念

**大学創設の背景** 大学史を大学観の変遷史として捉える場合、具体的には「大学」とされる高等教育機関の変遷をどのように捉えるのかという点に帰着することになる。つまり、どのような機関をもって「大学」とするのか、という点である。

前章において、日本における高等教育機関の変遷について概観したが、近代教育制度の発達という点からすれば、高等教育機関については戦前の場合、帝国大学を含む旧制大学、旧制専門学校、師範学校などが該当することから、それらを含んだ形で「大学」と称することも可能である。大学史の場合、現在の大学の前身としてそれらの高等教育機関を含めた沿革図を示している場合が多くみられる。なお、これは大学の創立年をいつに求めるのかという点とも関係してくる。

**大阪府立大学の「創立」** ここで、大阪府立大学を例にとって「創立」について考えてみることにしたい。公立大学法人大阪府立大学の創立は2005（平成17）年である。ただし、公立大学法人大阪府立大学は、大阪府立大学、大阪女子大学、大阪府立看護大学の三大学の統合によって設置された大学であることから、大学史的には三大



学の創立年にまで遡ることができる。三大学のうち、大阪府立大学（当時は浪速大学）と大阪女子大学は1949（昭和24）年に新制大学として発足しており、「大学」という名称にこだわるならば、創立年は1949（昭和24）年ということになる。

しかし、大阪府立大学（浪速大学）と大阪女子大学は、ともに戦前の旧制専門学校を母体として発足しており、それらの前身機関を含めると、大阪女子大学の前身機関にあたる大阪府女子専門学校が発足した1924（大正13）年が古い例となる。しかも、中等教育機関ではありながら一部のコースが高等教育機関相当の場合、その中等教育機関も前身として含むことが可能であろう。そのようにみれば、大阪府立大学（浪速大学）農学部の前身機関であった1942（昭和17）年設置の大阪高等獣医学校の母体となった大阪府立農学校の設置年である1888（明治21）年に、創立年を求めることができる。さらに、大阪府立農学校獣医科の母体となったのが、1883（明治16）年に設置された獣医学講習所（府立大阪医学校内）であることから、この1883（明治16）年を大阪府立大学の創立年とすることも可能である。このように、創立年は大学創設をどのように捉えるのかによって変わってくる点に注意したい。

**建学精神に基づいた「創立」** 具体的な前身機関を遡っていくことで創立年を確定するほかにも、大学創設の理念を重視した、いわば建学精神に基づいた創立年が示される大学も多く存在する。例えば東京大学の場合、東京開成学校と東京医学校との合併の上、1877（明治10）年に設置された東京大学の他に、1684（貞享元）年設置の天文方、1858（安政5）年設置の種痘所といった江戸幕府の設置機関の創立年を指すことが多い。さらに1797（寛政9）年設立の昌平坂学問所（昌平黉）を東京大学の源流の一つに含める場合もある。こうした創立に対する観点は、他にも1724（享保9）年設立の懷徳堂や1838（天保9）年設立の適塾に起源を求めている大阪大学や、1857（安政4）年の医学伝習所設置を創基とする長崎大学の例などがある。

なお私学では建学精神が明確である分、創立年についても独自の基準で設けている場合が多い。龍谷大学の場合、西本願寺に学寮が設けられた1639（寛永16）年に起源を求めており、2009（平成21）年で創立370周年を迎えるとしている。大谷大学の場合でも、東本願寺に学寮が創設された1665（寛文5）年を大学の淵源としている。なお、種智院大学では1881（明治14）年開設の総養の他、828（天長5）年に弘法大師空海が創設した綜藝種智院を起源としており、「綜藝種智院」の精神を受け継ぎ、近代日本における学校制度の創成期に「総養」という名称で設立されたとしている。このように大学の「創立」は、大学をどのように捉えるのかを映し出す要素としての側面も持ち合わせているのである。

### 3. 学風・校風をめぐって

ユニバーシティアイデンティティ ユニバーシティアイデンティティ (university identity 略称UI) とは、大学の存在意義を問い直すことにより、望ましい大学のあり方や理念を整備していく営為についての重要なキーワードである。具体的には、大学のシンボル（マーク、カラー）やメッセージを示すなど、大学としてのブランドイメージを確立することを指す場合が多い。こうしたアイデンティティの模索は、企業におけるブランドイメージの確立を、コーポレートアイデンティティ (CI) として重視している現状に倣ったものとも言えるが、大学が自らの存在意義を明らかにしていくという方向性は、社会における大学の役割を考える意味でもますます重要になってくるものと思われる。その意味で、ユニバーシティアイデンティティとは、大学が自らをどのように捉えているのかを映し出す鏡であるとも言えよう。なお、短期大学や単科大学などではカレッジアイデンティティ、高等学校や専修学校などではスクールアイデンティティといった名称が用いられることが多い。

それでは、具体的なユニバーシティアイデンティティにはどのようなものが存在するだろうか。例えば、広島大学では2003（平成15）

年、株式会社三菱総合研究所に「広島大学のユニバーシティアイデンティティに関する調査」を依頼し、詳細な調査を実施している。調査結果をまとめた報告書には、立命館大学や岡山大学などの例を引用しながら、アイデンティティ戦略として「挑戦し、行動する人材が育つ大学」を目指すという結論が述べられている。他に公立大学を例にとると、下関市立大学では2007（平成19）年に、ユニバーシティスローガンとして「海峡の英知。未来へ そして世界へ。」を掲げ、スクールカラーを「コバルトブルーマリン」に制定している。このようなスローガンやイメージ、スクールカラーといったものは、現在のところ、国公立や私立を問わずほとんどの大学で制定されており、大学のブランドイメージの確立に対して、決して無視することができない状況になっていることがうかがえよう。

しかしながら、こうした状況に対して重要なことは、ユニバーシティアイデンティティとして提示されたものが、どのように機能し、意識されているのかについて、常に検証していく姿勢であろう。また、スローガンやイメージを、大学の中でどのように定着させていくべきか、絶えず検討しておくことも求められているのではないだろうか。つまり、ユニバーシティアイデンティティを一過性のものと捉えず、大学の歴史の中でどのように位置付けるべきかが問われているのである。

**学風・校風の意味** そのように考えると、大学自身が高らかに掲げたイメージとともに、その大学が対外的にどう思われていたのかという点に注目してみるのも、重要であるように思われる。これは大学史＝大学観の変遷史とする視点を個別の大学に対して向けてみることを意味するが、別にそれほど新奇なことではない。むしろ、従来から「学風・校風」として認識されていたものを、積極的に取り上げてみようとする作業と理解すればよいだろう。

そもそも私学の場合は、創始者の建学理念や精神などが明確な場合が多いが、国公立大学の場合はそれほど明確ではない。それだけに、国公立大学の学風といったものは、大学に関係する人々が年月

をかけて作り上げていったイメージである場合が多い。これは、京都大学が2001（平成13）年に制定した基本理念を例にとるとわかりやすい。京都大学の基本理念は以下の文言から始まっている。

京都大学は、創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多面的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める。

ここでいう「創立以来築いてきた自由の学風」とは、1933（昭和8）年の瀧川事件を持ち出すまでもなく、京都大学の学風を最も顕著に示すキーワードである。しかしながら「自由の学風」は、別に文部省がそのような学風を目指して設置したのでもなく、まさに京都大学（京都帝国大学）に関係する人々（例えば高根義人（1867-1930）によるフンボルト流近代大学理念の流入など）が作り上げていったものである。

私学の校訓 私学の場合、創始者の建学理念や精神が明確なのは言うまでもない。福沢諭吉（1835 - 1901）が1858（安政5）年に創設した蘭学塾を起源とする慶應義塾大学は、塾訓である「独立自尊」が現在にまで受け継がれている。他には、1889（明治22）年創設の関西学院（1932（昭和7）年に大学昇格）において、第4代院長C. J. L. ベーツが1912（明治45）年に提唱したスクールモットー「Mastery for Service（奉仕のための練達）」などが有名である。こうした校訓やモットーは、昨今重視されつつあるアドミッションポリシー（admission policy）とも関係しており、大学がどのような人材を求めているのかを示す機能も果たしている。それだけに、大学における学風や校風については、大学として真摯に取り組まなければならない課題の一つであると言えよう。

なお、校訓の中で興味深い一例を紹介したい。大妻コタカ（1884-1970）が1908（明治41）年に創設した大妻学院（現大妻女子大学）

の校訓は「恥を知れ」である。大妻女子大学のホームページには、大妻コタカ自身による説明が以下のように掲載されている。

これは決して他人に対して言うことではなく、あくまでも自分に対して言うことです。人に見られたり、聞かれて恥ずかしいことをしたかどうかと自分を戒めることなのです。

(<http://www.gakuin.otsuma.ac.jp/academy/philosophy.html>)

**大阪府立大学の基本理念** 大阪府立大学については、2005（平成17）年に示された「公立大学法人大阪府立大学に係る中期目標」（大阪府知事提示）にある、以下の前文から大学の基本理念がうかがえる。

公立大学法人大阪府立大学は、大学を設置し、管理することにより、広い分野の総合的な知識と深い専門的学術を教授研究し、豊かな人間性と高い知性を備え、応用力や実践力に富む有為な人材の育成を行うとともに、その研究成果の社会への還元を図り、もって地域社会及び国際社会の発展に寄与することを目的としている。

この目的を果たすため、本中期目標の期間においては、特に、高度研究型大学として、全学的な研究水準の向上とともに、公立大学としての意義を踏まえ地域の課題や社会の要請に対応した特色ある研究の推進を図り、産学官連携等によりその研究成果の社会への還元に積極的に取り組む。また、教育面においては、入学者選抜の改善や学部教育における基礎・教養教育の充実、専門職業人養成のための実践的教育の展開等により、幅広い教養や豊かな人間性と高度な専門的知識を備えた、社会をリードする人材の育成を図る。さらに、これら教育研究活動の更なる活性化を図るため、効果的・機動的な運営組織の構築や、柔軟で弾力的な人事制度の整備、財務内容の改善等に取り組み、確かな経営感覚の下で、戦略的・弾力的な大学運営を推進する

ものとする。

ここでキーワードとなるのは「高度研究型大学」であり、大阪府立大学がどのような大学であるべきかという方向性について明確に示されている。今後は、こうした中期目標における更新部分や変更点の精査によって大学史＝大学観の変遷史を編述することも可能であろう。まさに、大学をどのように捉えるのかが問われているのである。

### 第3章 大阪府立大学史への誘い

本章では、前章でふれた大学史の意義をふまえ、大学史における大阪府立大学の位置とその意味について言及する。大阪府立大学は、公立大学としての特徴を強く反映した大学であるとともに、設立経緯が極めてユニークである。それゆえに、大学史という観点から大阪府立大学を眺めていくことにより、地方公共団体と高等教育機関との関係や、大阪の地域性について考察を進めていくこともできよう。

#### 1. 公立大学と大学史

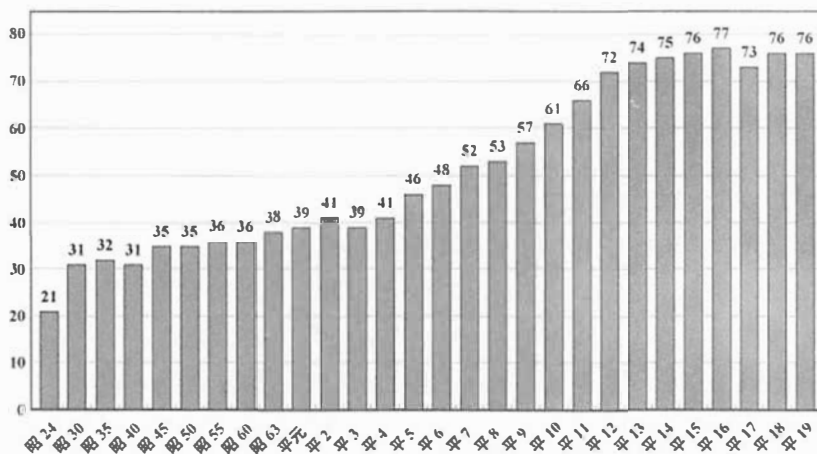
公立大学の現在 主に地方公共団体を設置者とする公立大学の現況については、文部科学省による『全国大学一覧』の他、「公立大学相互の協力により、公立大学の使命達成に寄与すること」を目的とした組織「公立大学協会」（1949（昭和24）年10月発足）が提供している刊行物やホームページによって、大体を把握することができる。同協会ホームページによれば、2007年度現在、公立大学は全国に76校（都道府県立55、市立17、事業組合立等4）存在しており、大学規模の目安となる学部数（夜間も1学部として数える）については、以下の通りとなっている。

5学部以上	6大学	(7.9%)
4学部	6大学	(7.9%)
3学部	8大学	(10.5%)
2学部	16大学	(21.1%)
1学部（1研究科を含む）	38大学	(50.0%)
大学院大学	2大学	(2.6%)

上記のように1学部からなる大学が多いことが公立大学の特徴であるが、これは1990年代以降、看護・医療系の学部を主とした大学

設置の動きが加速したことも関係している。なお2000年代以降は、とりわけ2004（平成16）年施行の地方独立行政法人法との関係から、新たに大学の法人化にともなう統合再編の動きも加わり、大学数にも若干の変動がみられる。

【表1】公立大学設置の推移



※公立大学協会ホームページ (<http://www.kodaikyo.org/>) 所載

**新制公立大学の設置** そもそも1949（昭和24）年4月の新制大学発足時、公立大学は以下の21大学しか存在しなかった。

名古屋女子医科大学（1947年6月設置）、神戸商科大学（1948年4月設置）、東京都立大学、横浜市立大学、岐阜県立大学、岐阜県立医科大学、岐阜薬科大学、名古屋薬科大学、西京大学、浪速大学、大阪女子大学、大阪市立大学、神戸市外国語大学、姫路工業大学、兵庫農科大学、山口県立医科大学、愛媛県立松山農科大学、高知女子大学、九州歯科大学、熊本女子大学、県立鹿児島大学



これらの大学は、後に改称や国立大学移管、さらには大学法人化の統合再編などを経て、現在のところ以下の通りとなっている。

名古屋女子医科大学、名古屋薬科大学	→	名古屋市立大学
神戸商科大学、姫路工業大学	→	兵庫県立大学
東京都立大学	→	首都大学東京
西京大学	→	京都府立大学
大阪女子大学、浪速大学	→	大阪府立大学
岐阜県立大学	→	岐阜大学工学部
岐阜県立医科大学	→	岐阜大学医学部
県立鹿児島大学	→	鹿児島大学医学部・工学部
兵庫農科大学	→	神戸大学農学部
愛媛県立松山農科大学	→	愛媛大学農学部
熊本女子大学	→	熊本県立大学
山口県立医科大学	→	山口大学医学部

他の公立大学も多くの場合、何らかの統合再編を経て現在に至っているのだが、このことは、公立大学の設置主体（設置者）が地方公共団体である点と大きく関係している。地方公共団体において、大学設置は選択的な政策の一つである以上、財政状況や地域の要望などへの反応が顕著なものとなる。したがって、時代状況に応じた学部の設置や統合再編が国立大学や私立大学以上に求められやすい立場にあると言えよう。具体的には、看護・医療系大学（学部）の設置や、女子大学の統合・共学化などが挙げられる。以下では、大阪府立大学、大阪女子大学、大阪府立看護大学を例にして、時代状況に応じた学部の設置の意味について概観する。

## 2. 産業教育史と社会背景

大阪府立大学と産業教育 終戦直後の社会状況下で、産業の復興はいわば悲願でもあった。大阪府では大阪市や堺市での大空襲の結果、

工場等が壊滅的な打撃を受けていた。それだけに、工業系・農業系産業復興に対する思いは切実であり、結果としてそれらの期待を担う産業大学の設置は必然的な流れであったと言える。

次章で詳述するように大阪府立大学は、戦前から存在した工業系・農業系の官立・府立専門学校（大阪工業専門学校、大阪府立化学工業専門学校、大阪府立機械工業専門学校、大阪府立淀川工業専門学校、大阪獣医畜産専門学校、大阪農業専門学校など）を中心にして設置された大学である。そもそも戦前の官立・公立専門学校の場合、戦時下の影響を色濃く受けており、軍需産業振興という面から新設されたものが数多く存在する。例えば東京府（後に東京都）の工業専門学校の場合、1940（昭和15）年から1944（昭和19）年のわずか5年間で、東京府立高等工業学校、東京府立化学高等工業学校、東京府立航空高等工業学校、東京都立機械高等工業学校と、4校も設置されている（大阪府立の場合は3校設置）。こうした専門学校の多くが、戦後の学制改革の結果、新制大学として生まれ変わるようになったのである。

**産業教育史としての大学史** こうした高等教育機関の流れを産業教育史という観点から眺めていくと、戦後の場合、経済成長の流れと一致している点で興味深い。すなわち、科学技術の進歩とそれに関連する産業構造の転換にともなって大量の科学技術者の養成が急務となり、1955（昭和30）年代から理工系学生の増募や学部・学科の新設が進んでいったのである。これは、日本の高度経済成長を支える基盤として、産業教育が極めて重視されたということを意味する。今日全国各地に存在する産業系高等教育機関（工学部、農学部や工業高等専門学校など）の設置・拡充の時期をみていくと、産業教育が社会背景と不即不離の関係にあることがわかる。実学重視とみなされる大学のあり方という点についても、その淵源にある社会背景との関係に目を向けておく必要がある。とりわけ公立大学の場合は、先述のように財政状況や地域の要望などへの反応が顕著である分、一層留意しておく必要があるだろう。つまり、時代が大学に対して

何を求めている（いた）のか、という観点である。その点で大阪府立大学は、公立大学としての特性を、ある意味で如実に反映した大学であるとみることができよう。

### 3. 女子教育と公立女子大学

大阪府女子専門学校 女子教育の充実は戦前から目されていたものの、そこには良妻賢母主義の思想が色濃く反映していた。ただ戦時中では、医師不足のために設置された女子医学専門学校や、同じく理科教員不足のために設置された府立女子専門学校（東京都立大学の前身校の一つ）のような場合も存在する。戦前に設置された女子高等教育機関は、師範学校系列の東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校2校と、以下の公立女子専門学校8校、女子医学専門学校8校（国外を含む）である。なお、公立女子専門学校の場合、広島県立広島女子専門学校のように高等女学校専攻科を前身としている場合も多い。

1923（大正12）年	福岡県立女子専門学校
1924（大正13）年	大阪府女子専門学校
1926（大正15）年	宮城県女子専門学校
1927（昭和2）年	京都府立女子専門学校
1928（昭和3）年	広島県立広島女子専門学校
1929（昭和4）年	長野県女子専門学校
1941（昭和16）年	山口県立女子専門学校
1943（昭和18）年	府立女子専門学校
1943（昭和18）年	岐阜県立女子医学専門学校
1943（昭和18）年	名古屋市立女子高等医学専門学校
1944（昭和19）年	福島県立女子医学専門学校
1944（昭和19）年	高知県立女子医学専門学校
1944（昭和19）年	山梨県立女子医学専門学校

- 1945（昭和20）年 北海道庁立女子医学専門学校  
 1945（昭和20）年 秋田県立女子医学専門学校  
 （1945（昭和20）年 大連女子医学専門学校）

**公立女子大学の誕生** 1945（昭和20）年12月、男女間における教育機会均等と教育内容の平等化を掲げた「女子教育刷新大綱」が文部省から発表された。この大綱にも示されているように、戦後の女子教育は、それまでとは異なった思潮のもとで一層の拡充が図られることになったのである。高等教育の面では、女子大学や女子短期大学設置への動きが加速したことが挙げられる。2つの女子高等師範学校は、お茶の水女子大学、奈良女子大学へと昇格したように、先述の公立女子専門学校の場合も、多くは公立女子大学、女子短期大学への昇格がなされた。また、静岡女子大学のように、女子短期大学を昇格して新たに公立女子大学として設置されることもあった。現在に至るものを含めて、公立女子大学は全国に以下の7校が存在していた（現在の校名は（ ）内に記載）。

- 1947（昭和22）年 名古屋女子医科大学（名古屋市立大学）  
 1949（昭和24）年 福岡女子大学  
 1949（昭和24）年 大阪女子大学（大阪府立大学）  
 1949（昭和24）年 広島女子大学（県立広島大学）  
 1949（昭和24）年 山口女子大学（山口県立大学）  
 1949（昭和24）年 高知女子大学  
 1949（昭和24）年 熊本女子大学（熊本県立大学）  
 1949（昭和24）年 愛知県立女子大学（愛知県立大学）  
 1967（昭和42）年 静岡女子大学（静岡県立大学）

その後、多くの公立女子大学が地方公共団体の財政状況悪化の影響を受け、他の公立大学との統廃合がなされるようになり、結果として共学化への道を歩んでいくことになった。大阪女子大学も2005

(平成17年)に大阪府立大学、大阪府立看護大学と統合し、新たに大阪府立大学として出発している。

#### 4. 福祉・医療制度の展開と大学

社会福祉教育と大学 日本において社会福祉の教育・研究が本格的に始まったのは戦後になってからのことである。大阪府では1947(昭和22)年に近畿府県社会事業教育懇談会が開催され、関西においても社会事業従事者育成機関の設置が急務とされた。これを受けて1948(昭和23)年に大阪社会事業学校が、さらに1950(昭和25)年には大阪社会事業学校を母体とする大阪社会事業短期大学が設置されるに至った。大阪社会事業短期大学以降の流れについては第6章で概観するが、社会福祉に関する高等教育機関が戦後間もなく設置されたという事実は、ある意味において当時の社会福祉に関する識見を示したものと言えよう。その後、高度経済成長のもとで福祉専門職の養成が急務となり、全国的に社会福祉系大学、学部の設置が続いた。現在、公立大学で社会福祉系学部が設置されているのは、岩手県立大学、山口県立大学、高知女子大学の3大学であるが、私立大学を含めると30数校にまで及んでいる。近年、看護系学部との統合などによって、医療福祉(保険衛生学、公衆衛生学など)系学部の新設などもみられるようになり、社会福祉に関する教育・研究は今後ますます重要視されていくものと思われる。

看護短期大学・看護大学の開設 高度経済成長のもとで福祉専門職の養成が急務となった状況は、医療現場においても全く同様であった。とりわけ1970年代頃からは、都市部における看護専門職不足が社会問題化するようになり、看護専門職の養成は必須の課題となっていた。大阪府では、こうした流れの中、1978(昭和53)年に大阪府立看護短期大学(後に大阪府立看護大学医療技術短期大学部)を設置し、さらに1994(平成6)年には大阪府立看護短期大学を母体とする大阪府立看護大学が設置された。ちなみに、大阪府立看護短期大学の卒業生は1,745名を数え、大阪府における看護専門職充実に

対して大きな役割を果たしていたことがうかがえよう。

なお、2008（平成20）年には厚生労働省の「看護基礎教育のあり方に関する懇談会」において、高度医療へ対応するため、専門学校が中心となっていた看護専門職の養成を、将来は大学に移行させるのが望ましいとの提言がなされたことから、今後は看護系大学の整備が一層進んでいくものと思われる。その意味でも、大阪府における大阪府立看護短期大学、大阪府立看護大学の設置は、社会福祉系の分野と同様、大いに注目すべきものであると言えよう。

## 第4章 大学通史(1) 浪速大学に至るまで

本章では旧大阪府立大学について、前身機関のうち、6つの農業系・工業専門学校の設置から、浪速大学としての新制大学発足に至るまでの流れを概観する。これらの専門学校については、さらにその前身となる教育機関も存在しており、それらを含めると、1883(明治16)年設置の獣医学講習所にまでさかのぼることができる。

### 1. 農業系専門学校

大阪の農業教育 富国強兵、殖産興業を標榜する明治政府が重視した教育政策は、あくまでも実学主義の理念に適ったものであった。近代化を牽引するエリート層の育成をねらった帝国大学や高等学校といった高等教育機関と並んで、産業教育を担った高等専門学校なども、その意味では極めて重要な意味を持っていたのである。

大阪府における産業教育の始まりは1871(明治4)年に創設された大貧院における授産救貧事業に求められるが、本格的な産業教育は1880(明治13)年創立の大阪商業講習所(大阪市立大学の前身機関とされる)や後述する獣医学講習所などの教育機関が設置されてからのことである。

農業教育については農林、蚕糸、畜産、水産といった分野に関する専門教育が挙げられるが、大阪府においては農業振興という観点から、家畜の疾病治療や繁殖に従事する獣医師の養成もなされていた。そもそも獣医師養成目的は、帝国陸軍における軍馬の維持や労役牛馬の確保、近代的畜産業開発という三点にあり、明治初年に札幌農学校、駒場農学校、陸軍馬医学会(後の陸軍獣医学校)が設立されたのもそのためである。そうした中、大阪において明治の早い段階から獣医師養成機関が設置されていたことは、大いに注目すべきであろう。

獣医学講習所 1883(明治16)年2月5日に、獣医師の養成を目的とした獣医学講習所が、大阪市北区にある府立大阪医学校内に設置

された。獣医学講習所仮規則第一条には「当獣医学講習所ハ大阪府勸業課ニ属シ獣医学ノ大意ヲ教授スル所ナリ」とあり、入学資格は17歳以上で修業年限は2年とされていた。獣医学講習所については、1888（明治21）年設置の大阪府立農学校獣医科へと引き継がれることになるが、今日ある大阪府立大学（生命環境科学部獣医学科）の淵源は、この獣医学講習所に求めることができるのである。ちなみに府立大阪医学校は、後の大阪帝国大学医学部（現大阪大学医学部）の前身として位置付けられており、大阪府下の高等教育機関はそれぞれが歴史的に見て密接なつながりを持っていると言えよう。

**大阪府立農学校** 全国的に農業教育への関心が高まる中、1888（明治21）年3月には大阪府会郡部会において農林学校設立の建議が可決された。これを受けて1888（明治21）年10月22日、大阪府立農学校が堺区車之町（現堺市堺区車之町）の旧堺県師範学校校舎内に開校した。農学校には農科と獣医科が置かれ、入学資格は高等小学校卒業の者で修業年限は3年であった。翌1889（明治22）年3月には付属養蚕場が西成郡佃村（現大阪市西淀川区佃町）に設置された。なお付属養蚕場は1890（明治23）年に蚕業専修科と改称されたが、志望者の減少から1898（明治31）年には廃止された。

**農学校の御勝山移転** 大阪府立農学校については、設備の充実にともない敷地も少々手狭となってきたため、1890（明治23）年、東成郡鶴橋村大字岡（現大阪市生野区）の約43,000坪に及ぶ敷地に移転することになった。移転に際し附属蚕業場も新学舎に移設され、蚕業専修科に改められた。この新学舎は「勝山農学校」とも呼ばれ、西洋風の本館が一際目を引くものであったという。1909（明治42）年には獣医科が拡張され畜産科と改称、新たに園芸科が増設された。さらに、1924（大正13）年の学則改正により農科が農業科（修業年限5年）に、畜産科が獣医畜産科（修業年限4年）に改組され、園芸科が分離された。この園芸科については、豊能郡秦野村尊鉢（現池田市井口堂）にあった豊能郡立農林学校と合併し、同年豊能郡秦野村大字畑（現池田市旭丘・大阪府立池田高等学校）に移転し、大





【図3】 勝山時代の大阪府立農学校

(作道好男・作道克彦編(1983) 所載)

阪府立園芸学校として発足することになる。

ところで、このように入学資格や修業年限の面でみていくと、大阪府立農学校は当時の旧制中学校(今日の高等学校に相当)に対比される教育機関と位置付けられるが、獣医師養成という観点を重視するならば、少なくとも獣医(獣医畜産)科については専門教育機関の一種と捉えることも可能であろう。ちなみに、日本獣医学史研究書の多くは、大阪府立農学校を旧大阪府立大学農学部獣医学科の淵源としている。

**大仙移転と昇格運動** 大阪府立農学校の周辺も市街化が進んできたことから学舎再移転の計画が浮上し、1926(大正15)年に堺市大仙町(現堺市中区大仙町)へと移転することになった。移転先の新学舎は鉄筋コンクリート三階建の勇壮なもので、当時の新聞は「天下に誇る壮麗さ」と称賛している(「大阪朝日新聞」1926. 11. 16付)。

ところで、学舎の大仙移転を機に大阪府立農学校の高等専門学校昇格を求める運動が高まった。それまでの農学校の教育課程は中等教育程度とみなされており、予算規模も当時府下に設置されていた高等学校や女子専門学校に遠く及ばなかった。また、1926(大正15)年公布の獣医師法(翌年から施行されたが、経過措置として施行後12年以内は従前の規則を適用)では、専門学校以上の卒業者にしか



【図4】大仙時代の大阪府立農学校

(作道好男・作道克彦編(1983)所載)

獣医師資格が与えられず、経過措置の切れる1939(昭和14)年以降、大阪府立農学校の卒業者に獣医師資格が与えられなくなることから、昇格への願いは切実なものであった。そうした動きを受けて、1933(昭和8)年、1934(昭和9)年度の大阪府会で昇格建議案が満場一致で可決され、昇格への動きは一気に加速する。ところが、1934(昭和9)年9月21日の室戸台風により大阪府下全域に甚大な被害を被ってしまい、昇格用予算と目していた府の剰余金が全く使えなくなったこともあり、昇格案もそのまま立ち消えになってしまったのである。その後、昇格問題については時局の変化によって新たな展開を迎えることになる。

大阪高等獣医学校・大阪獣医畜産専門学校 先述の通り、獣医師法の施行により専門学校卒業生でなければ獣医師資格が与えられなくなったことから、大阪府立農学校獣医畜産科は自然廃止の形を取らざるを得なくなった。しかしながら、1937(昭和12)年に日中戦争が勃発、多くの兵員が動員されるに及んで、軍馬への需要が急増する事態となった。これに伴い獣医師の育成が急務となったことから、中学校卒業生のうち、2年以上獣医学を修めた者や3年以上の獣医実務従事者等については、獣医師試験受験資格が認められることに

なったのである。そこで大阪府立農学校では、1939（昭和14）年3月に獣医畜産科を廃止した後、4月から新たに、中学校卒業者を対象とする修業年限2年の男子第二部獣医科を設置することになった。この男子第二部獣医科が基礎となって、1942（昭和17）年1月31日には専門学校への昇格が認められ、大阪高等獣医学校として大阪府立農学校に併置されるに至った。昭和21年度からは大阪獣医畜産専門学校と改称され、1949（昭和24）年4月の浪速大学設置に際しては、農学部獣医学科の母体として吸収されることになったのである。

**大阪農業専門学校** 1944（昭和19）年2月28日に大阪農業専門学校の設置が認可され、先述の大阪府立園芸学校（1941（昭和16）年に池田市神田町へ移転）に併設されることになった。修業年限は3年で、園芸科と農芸化学科が置かれていた。戦後は復員学生の教育のために専修科も設けられたが、1949（昭和24）年4月の浪速大学設置に際し、農学部の母体として、大阪獣医畜産専門学校とともに吸収されることになった。なお、大阪府立園芸学校については、1948（昭和23）年4月の学制改革により大阪府立園芸高等学校と改称され、新制高等学校として発足し、今日に至っている。

**大阪府立農業高等学校** 大阪府立農学校については、1948（昭和23）年4月の学制改革により大阪府立農業高等学校と改称され、新制高等学校として発足したが、翌1949（昭和24）年4月の浪速大学設置に伴い募集停止が決定されることになり、1952（昭和27）年3月に最後の卒業生を送り出すことで廃校となった。大阪府立農学校以来の卒業生は約4,000名にも及び、府下有数の産業教育機関として十分な成果をもたらしていたと言えよう。

## 2. 工業専門学校

**大阪の工業教育** 明治・大正期における大阪府下の工業教育機関については、1896（明治29）年設置の大阪工業学校、1905（明治38）年設置の私立堺市教育会附属実業補習学校、1907（明治40）年設置の（大阪）市立工業学校などが存在した。大阪工業学校については、

1901（明治34）年に大阪高等工業学校と改称され、1929（昭和4）年には大阪工業大学へ昇格、その後1933（昭和8）年設置の大阪帝国大学工学部として発足することになった。また、私立堺市教育会附属実業補習学校は堺市立堺工業学校に、市立工業学校は大阪市立都島工業学校へと繋がっていった。工業教育機関については、他に職工学校が数校存在しているが、これらは主に戦後発足した工業高等学校の母体となっている。

**大阪高等工業学校** 1931（昭和6）年の満州事変勃発以降、工業教育機関に対する一層の整備が図られた。大阪府下では、大阪工業大学（大阪帝国大学の前身）の他に、新たな工業系高等教育機関の設置が計画され、地元有志による熱心な誘致運動の結果、1939（昭和14）年、官立の大阪高等工業学校が堺市百舌鳥東之町（現堺市中区学園町）に設置された。入学資格は中学校卒業の者で修業年限は3年であった。なお費用の多くは、大阪府（100万円）、堺市（30万円）、南海電鉄（70万円）、一般篤志家からの寄付を受けてのものであったことから、いかに地域の期待を背負っての設置であったかがうかがえよう。設置当初は機械科、精密機械科、原動機械科、電気科、金属工業科の5学科からなり、1942（昭和17）年には造船科が増設、併せて修業年限4年の第二部（夜間）が設置された。なお、第二部については、大阪市天王寺区大道の旧大阪府立盲学校校舎（現大阪教育大学天王寺キャンパス）を仮校舎として使用していた。

**大阪工業専門学校** 1944（昭和19）年には大阪工業専門学校と改称、学科も機械科、原動機科、電気科、金属工業科、造船科、船用機械科に再編されることになった。1949（昭和24）年4月の浪速大学設置に際して、工学部の母体として吸収されることになった。

**大阪府立高等工業学校の設置** 太平洋戦争の戦況が活発化するとともに、工業系技術者養成が必須課題となってきた。そこで政府は、官立工業専門学校の増設を決定し、また、各府県に対する技術系専門学校の設立を要請した。これを受けて大阪府では、1943（昭和18）年4月に大阪府立堺高等工業学校が、1944（昭和19）年2月に大阪



【図5】大阪高等工業学校

(作道好男・作道克彦編(1982)所載)

府立航空高等工業学校と大阪府立淀川高等工業学校が、それぞれ工業学校に併設される形で設置されることになったのである。

大阪府立堺高等工業学校から大阪府立化学工業専門学校に至るまで

1943年(昭和18)年3月、大阪府立堺高等工業学校が、堺市耳原町(現堺市堺区大仙中町)にあった大阪府立堺工業学校に併設された。設置当初は工業化学科、金属工業科の2科からなり、翌1944(昭和19)年には化学機械科、石油工業科(燃料科)が増設、工業化学科は化学工業科に改称された。さらに1945(昭和20)年には、ゴム工業科も増設された。

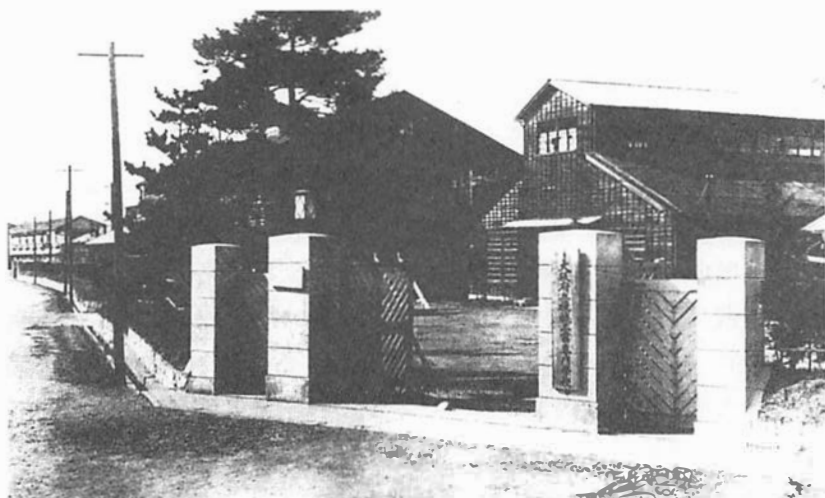
1946(昭和21)年3月2日には大阪府立堺工業専門学校と改称、さらに同年3月30日には大阪府立化学工業専門学校と改称され、工業経営科が増設された。1948(昭和23)年に燃料科が廃止、化学工業科へ合併され、最終的に、1949(昭和24)年4月の浪速大学設置に際して、工学部の母体として吸収されることになった。

大阪府立航空高等工業学校から大阪府立機械工業専門学校に至るまで 1944(昭和19)年2月、大阪府立航空高等工業学校が布施市宝

持（現東大阪市宝持）所在の大阪府立航空工業学校に併設する形で設置され、航空機科、航空発動機科の2科で発足した。ところが1945（昭和20）年6月に戦災により校舎が焼失、布施市小阪水道局跡地を借り受け、仮校舎として授業を継続した。

その後、1945（昭和20）年8月15日の終戦とともに大阪府立第三工業専門学校と改称、学科についても、航空機科が機械科に、原動機科が航空発動機科に改称された。

さらに、1946（昭和21）年4月に大阪府北河内郡寝屋川町秦（現寝屋川市幸町）所在の厚生省大阪機械技術員養成所跡施設の譲渡を受けて移転、同年6月に大阪府立機械工業専門学校と改称された。1949（昭和24）年4月の浪速大学設置に際しては、工学部別科の母体として吸収されることになった。



【図6】大阪府立機械工業専門学校

（作道好男・作道克彦編（1982）所載）

大阪府立淀川高等工業学校・大阪府立淀川工業専門学校 1944（昭和19）年2月、大阪府立淀川高等工業学校が大阪市旭区所在の大阪府立淀川工業学校に併設する形で設置され、機械科、電気科の2科で発足した。戦後、1946（昭和21）年3月31日に大阪府立淀川工業

専門学校と改称、同年6月5日には大阪府立電機工業専門学校と改称、さらに同年11月30日に大阪府立淀川工業専門学校に再改称された。1949(昭和24)年4月の浪速大学設置に際しては、工学部別科の母体として吸収されることになった。

## 第5章 大学通史(2) 浪速大学から大阪府立大学へ

本章では、1949（昭和24）年に浪速大学として設置され、1955（昭和30）年に改称した大阪府立大学について、2005（平成17）年に公立大学法人大阪府立大学として再編されるまでの流れについて概観する。

### 1. 浪速大学設置と大阪府立大学への改称

**浪速大学設置** 戦後、新制大学構想の発表にともない、従来の高等教育機関に対して大規模な変革がもたらされた。大阪府では、1948（昭和23）年5月の大阪府会において、大阪府新制大学設立準備委員会（委員長浅香忠雄大阪府教育委員会委員長）が設けられ、以下の4点を骨子とする新制の産業大学設置が計画されることになった。

- 1 官立大阪工業専門学校を府へ移管
- 2 大阪府立浪速高等学校を国へ移管（図書・備品は新制大学へ）
- 3 官立大阪青年師範学校を府へ移管（教員養成系学部之母体）
- 4 府立5専門学校（大阪府立化学工業専門学校、大阪府立農業専門学校、大阪府立獣医畜産専門学校、大阪府立機械工業専門学校、大阪府立淀川工業専門学校）を統合（各関連学部之母体）

さらに、具体案作成に向けて大阪府立浪速大学設立計画委員会（委員長眞島利行元大阪帝国大学総長）が組織され、大阪工業専門学校、大阪府立化学工業専門学校を母体とする工学部、大阪府立農業専門学校、大阪府立獣医畜産専門学校を母体とする農学部、大阪青年師範学校を母体とする教育学部、そして、大阪府立機械工業専門学校、大阪府立淀川工業専門学校を母体とする工学部別科の設置が決定され、1949（昭和24）年2月21日には工学部、農学部、3月25日には教育学部がそれぞれ設置の認可を受けた。4月1日に喜多源逸京都大学名誉教授を初代学長として迎え、6月1日に第1回入学



宣誓式、11月8日には開学記念式が挙行され、ここに新制大学である浪速大学が発足したのである。新制大学の名称は、『古今和歌六帖』にある古歌「なにわづに咲くやこの花冬籠り今は春べと咲くやこの花」にちなんでおり、大阪府部長会席上で提案があり採用されたものである。

「日本一の大学をつくる」 なお、浪速大学設置に関しては幾多の紆余曲折も存在した。例えば官立大阪工業専門学校の府への移管については、国から府への移管という変則的なあり方に関して、研究環境劣化のおそれなどを理由に当初から根強い反対があった。しかも、大阪工業専門学校は戦前から大学昇格を望んでいた経緯もあり、新制大学設置に際しては、同じく官立の大阪青年師範学校との合併により、官立堺大学設置を計画する動きが存在したのである。さらに教授会では大阪市立大学への参加が取り上げられるなど、情勢は大変流動的であった。そうした動きに対して、調整にあたった赤間文三大阪府知事(当時)は「日本一の大学をつくる心組みだから安心してくれ」という旨の発言を終始行うことで、事態の収拾に努めたという。結果として、7つの専門学校を母体とする浪速大学設置に落ち着いたわけだが、大学設置に対し当時の大阪府が、並々ならぬ態度で臨んでいたことがうかがえよう。

工学部別科・工業短期大学部 1949(昭和24)年の浪速大学設置において、大阪府立機械工業専門学校と大阪府立淀川工業専門学校は、機械科・電気科の二学科からなる工学部別科の母体となった。この工学部別科は翌1950(昭和25)年に昼夜二部制の短期大学に改組され、第一部(昼間二年制)が旧大阪府立機械工業専門学校校地にあたる寝屋川学舎に、第二部(夜間三年制)が旧大阪府立淀川工業専門学校校地にあたる淀川学舎に設置されることになった。1951(昭和26)年には溶接科が増設され三学科となり、1953(昭和28)年に農業短期大学部設置にともない、工業短期大学部と改称された。

その後、第一部(寝屋川学舎)については、1962(昭和37)年から学生募集を停止し、1963(昭和38)の大阪府立工業高等専門学校

設置を経て、1964（昭和39）年3月31日をもって廃止された。また、第二部については、1967（昭和42）年に淀川学舎から大阪市生野区勝山南の生野学舎に移転の後、1980（昭和55）年から学生募集を停止、1983（昭和58）年3月31日をもって廃止された。

**農業短期大学部** 浪速大学の発足と関連して、大阪府は南河内郡黒山村他数カ町村有志らによる黒山農業短期大学設置期成同盟の要望を受け、大学に対して農業短期大学併設を決定した。これにより、1953（昭和28）年に、南河内郡黒山村（現堺市美原区）の大阪府立農芸高等学校校地と共用する形で、農業科・農産製造科の二学科からなる農業短期大学部（黒山学舎）が設置された。1960（昭和35）年に農産製造科が農産製造化学科に改組されたが、1962（昭和37）年から学生募集を停止し、1964（昭和39）年3月31日をもって廃止された。黒山学舎はその後、もとの大阪府立農芸高等学校へと引き継がれ、現在に至っている。なお、大阪府立農芸高等学校は1917（大正6）年設置の大阪府南河内郡黒山村他六カ村学校組合立大阪府黒山実業学校（後に大阪府立黒山農学校、大阪府立農芸学校と改称）を淵源としていることから、大阪府立農学校とともに大阪府における農業系実業教育について考察する上で重要であると言える。

**大阪府立大学への改称** 1955（昭和30）年9月1日から、「浪速大学」が「大阪府立大学」へと改称された。次項以下、浪速大学・大阪府立大学における各学部の流れについて概観する。

## 2. 工学部の流れ

**工学部の流れ** 1949（昭和24）年の浪速大学発足時、工学部は官立大阪工業専門学校校地に設置された。当初は学科制をとらず、専門基礎部門（応用数学第一・第二、応用物理学第一・第二の専門基礎講座）のほか、機械工学部門、電気工学部門、金属工学部門、工業化学部門、船舶工学部門、工業経営部門の6部門からなっていたが、1952（昭和27）年9月からは学則改正にともない、学科に改められた。1954（昭和29）年には、工業化学科が応用化学科に、1962（昭

和37)年には工業経営学科が経営工学科に、それぞれ改称されている。学科については、1960(昭和35)年に航空工学科(ただし昭和29(1954)年には、機械工学科内のコースとして既設)、1961(昭和36)年に電子工学科、1962(昭和37)年に化学工学科、1971(昭和46)年に数理工学科(専門基礎講座が母体となる)が増設され、1993(平成5)年まで10学科66講座制の組織であった。なお工学部共通講座として、1971(昭和46)年に環境化学講座、1973(昭和48)年に環境工学講座が設置されている。

1993(平成5)年に10学科66講座制が抜本的に見直され、機械システム工学科、エネルギー機械工学科、航空宇宙工学科、電気電子システム工学科、電子物理工学科、情報工学科、応用工学科、化学工学科、材料工学科、機能物質科学科、海洋システム工学科、経営工学科、数理工学科の13学科(66講座制)に再編、さらに1995(平成7)年には26講座の大講座制が導入されることになった。

工学研究科設置と大学院部局化 浪速大学(大阪府立大学)においても、在学生の卒業を受けて大学院開設が企図されることになり、1953(昭和28)年4月に、工学研究科が設置された。当初は機械工学、電気工学、金属工学、応用科学の4専攻の修士課程のみであったが、1955(昭和30)年からは博士課程も設置され、専攻も順次拡充していった。1995(平成7)年には機械系専攻、電気・情報系専攻、物質系専攻の3専攻に改組された。

2000(平成12)年4月からは、大学院重点化にともない、学部の教員を大学院に移行する部局化が実施され、工学部教員は大学院工学研究科所属となった。

### 3. 農学部の流れ

農学部の流れ 1949(昭和24)年4月に大阪農業専門学校と大阪獣医畜産専門学校を母体として、浪速大学農学部が設置された。その際、母体校をどちらにするのかという問題が起こったが、府下有数の歴史を誇る大阪府立農学校(大阪府立農業高等学校)の流れを汲

んだ大阪獣医畜産専門学校の校地（大仙学舎）を継承することになった。当初は、農学科、園芸学科、農芸化学科、獣医学科の4学科からなっていたが、農学科、園芸学科は大阪農業専門学校（池田学舎）で、農芸化学科は大阪府立農業高等学校内に新築された実験研究室で、獣医学科は大阪獣医畜産専門学校で、それぞれ授業が行われた。

1952（昭和27）年、大阪府立農業高等学校が廃校となり、校地と校舎が大学に移管された。これを受けて、農学科と園芸学科が大仙学舎に移転した。なお農学科と園芸学科については、農業近代化への動きを先取すべく、1964（昭和39）年4月に農業工学科と園芸農学科へと再編されることになった。1965（昭和40）年以降、校舎の竣工にともない順次大仙キャンパスから中百舌鳥キャンパスへの移転が行われ、建物等については1971（昭和46）年内にほぼ移転を終えた。その後、1994（平成6）年4月に、獣医学科を除く農学科、園芸学科、農芸化学科の3学科が、応用植物科学科、地球環境科学科、応用生物化学科へと再編された。さらに1997（平成9）年4月からは、同じく獣医学科を除く3学科で大講座制が導入された。なお獣医学科については、専門性の観点から、1984（昭和59）年4月より修業年限が6年に改められている。

**付属施設の整備** 農学部の付属農場は、大阪府立農業高等学校の校内農場と経済農場を継承して発足した（ただし、経済農場は後に大阪府立養護学校用地に転用されることになった）。1957（昭和32）年、教育学部の廃止にともない城之山農場が移管、さらに百舌鳥高田町に果樹園（園芸学科南方地区）が設置された。その後、1969（昭和44）年の農学部学舎移転とともに中百舌鳥キャンパス内にも農場が整備され、1972（昭和47）年4月に現在地に完成、同時に城之山農場などは閉鎖された。

また、家畜病院については、大仙キャンパスにあった大阪獣医畜産専門学校附属家畜病院が移管されて発足したが、農学部の中百舌鳥キャンパス移転に合わせて、1970（昭和45）年に附属家畜病院も

新築されることになった。

農学研究科から農学生命科学研究科へ 1955(昭和30)年4月、園芸学、農芸化学、獣医学の3専攻からなる大学院農学研究科修士課程が設置され、1959(昭和34)年には農芸化学専攻に博士課程が増設された。さらに、1964(昭和39)年に獣医学専攻に博士課程が、1965(昭和40)年に園芸農学専攻(博士課程)が増設された。これらの増設とも関連して、1967(昭和42)年には農学専攻、園芸学専攻の修士課程が、園芸農学専攻、農業工学専攻の修士課程に改編されることになった。また、1969(昭和44)年に農業工学専攻の博士課程が増設された。その後、1984(昭和59)年から獣医学科の修業年限が6年に変更されたことを受けて、1990(平成2)年4月には4年制一貫の獣医学専攻博士課程が設置された。

1997(平成9)年4月には農学研究科から、農学環境科学専攻、応用生命科学専攻、獣医学専攻からなる農学生命科学研究科へと再編された。さらに、2000(平成12)年4月からは工学部と同様、大学院重点化にともない、学部の教員を大学院に移行する部局化が実施され、農学部教員は大学院農学生命科学研究科所属となった。

#### 4. 教育学部の設置と廃止

青年学校の教員養成 戦前には中等教育課程には進学せず、勤労に従事していた青少年を対象とする実業補習学校が多く存在していた。これらの学校は、後に兵式訓練施設である青年訓練所と統合されることになり、1939(昭和14)年4月の青年学校令施行によって、青年学校として組織されることになった。この青年学校教員を養成する機関として、1926(大正15)年に大阪府立農学校に併設された大阪府立農業補習学校教員養成所を母体とする形で、1935(昭和10)年に大阪府立青年学校教員養成所が設置された。

大阪青年師範学校 さらに、1944(昭和19)年には師範学校令が改正され、全国の公立青年学校教員養成所が全て官立に移管され、専門学校に相当する青年師範学校として位置付けられることになった。



【図7】浪速大学教育学部城之山学舎

大阪府では、1944（昭和19）年4月に大阪青年師範学校が堺市百舌鳥西之町（現堺市北区百舌鳥西之町、通称城之山）に設置された。

教育学部の設置 戦後、青年学校は廃止

されたが、師範学校を前身とする新制大学の教育学部との合併によって新たに発足することが多かった。ところが、大阪府の場合は大阪第一師範学校（通称天王寺師範）、大阪第二師範学校（通称池田師範）と既存の学校規模が極めて大きかったため、統合に際して多くの困難が予想された。そこで、大阪青年師範学校を府へ移管することによって決着が図られたのである。

1949（昭和24）年3月25日に浪速大学教育学部の設置が認可され、福山重一大阪青年師範学校校長が教育学部長事務取扱に、のち同年12月21日阿部良之助助教授が学部長に任ぜられた。

教養部との統合 教育学部はその後、一般教育等の課程を担当する教養部と統合されることになり、専門教育課程とともに一般教育の強化が図られた。1952（昭和27）年4月から、それまで教養部に所属していた教員はすべて教育学部に配置替えとなり、いわば新たな教育学部が発足することになったのである。

また、1953（昭和28）年4月の学則改正により、教育学部の専門教育課程についても、高等学校教員養成課程として工業教育科（電気工学コース、機械工学コース、工業化学コース）と農業教育科（総合農学履修コース）が、中学校職業指導科教員養成課程として職業指導科（職業指導コース、労務管理コース）が置かれた。

教育学部の廃止 ただ、教育学部については設置当初から多くの問題点が存在していた。1952（昭和27）年11月から1956（昭和31）年

11月まで浪速大学(大阪府立大学)学長を務めた堀場信吉が、当時の教育学部を回想して「これが大学といい得ようか」(『大阪府大の思い出』『大阪府立大学十年史』所収)とまで慨嘆したように、特に設備上の貧弱さは致命的なものであった。しかも、設置者である大阪府においても、教育学部に対する視線は厳しく、廃止の意向を持っていた。この、大阪府当局が明らかにした教育学部廃止の意向については、『大阪府立大学十年史』の中で次のように述べられている。

- 1 教育学部を従来のままのあり方において充実してゆくことは、既設の工学部・農学部の充実と重複し、本学の教育体系を乱すばかりでなく、府の財政上からみても適切な策ではない。
- 2 新制大学の多くはいずれも教職課程を設け、それによって教員免許状取得の途を開いている。本学の工・農両学部においても同様の方針を採り、現にその目的を達成している。また、職業指導は義務教育の一環であり、この教員養成は学芸大学において専ら取り扱われ拡充されつつある。したがって、本学に前記のような使命をもった教育学部を存置する意義は著しく乏しいものになった。
- 3 卒業生の就職についても、教職以外の職場を希望するものが多い。当初は新学制による有資格教員の養成も必要であったが、その後有資格者が一応配分されるに至ったため、教員就職の途が急激に狭くなってきた。

(『大阪府立大学十年史』 p.112)

以上のような理由から、学内での討議を経て、1954(昭和29)年度から教育学部の学生募集を停止、1957(昭和32)年3月31日に在籍学生の卒業完了を受けて教育学部が廃止されることになった。学生募集期間は1949(昭和24)年度から1953(昭和28年)度までの5年間ではあったものの、総計397名の卒業生を輩出した教育学部は、このようにして終焉を迎えたのである。

## 5. 経済学部の設置

**経済学部の設置** 教育学部の廃止については、産業経済都市大阪の実態に合致した大学設置を目指す思潮も関係していた。そこで、教育学部に代わり経済学部設置への動きが高まり、1954（昭和29）年に経済学部が設置された。設置に際しては、他学部とは異なり母体となる高等教育機関を継承していなかったこともあり、いわばゼロからのスタートを切ったことになる。経済学部専用校舎については1957（昭和32）年に完成し、1959（昭和34）年には大学院経済学研究科修士課程、1961（昭和36）年には博士課程が開設された。経済学部の設置当初は、経済原論をはじめとする11（後に15）講座からなる経済学科の1学科で出発したが、その後1966（昭和41）年に6講座からなる経営学科が増設され、合わせて2学科21講座となった。また、1991（平成3）年からは11講座の大講座制に再編成された。

**サテライト教室の開設** 大学院については、1959（昭和34）年に修士課程が、1961（昭和36）年には博士課程が設置された。その後、社会人特別選抜制度が、1994（平成6）年度から博士前期課程（修士課程）、ついで1996（平成8）年度から博士後期課程（博士課程）において、それぞれ実施されることになった。また、2001（平成13）年には、大阪市中央区難波中の「なんばパークスタワー」7階に「なんばサテライト教室」が開設され、社会人に広く門戸を開いた研究教育を実施している。

## 6. 教養部から総合科学部へ

**教養部の設置と教育学部との合併** 昭和24年の浪速大学発足に際し、一般教育・外国語・保健体育を管掌する教養部が設置された。学科目は人文科学、社会科学、自然科学、外国語、保健体育、教職からなっており、授業は大阪工業専門学校校舎を利用して行われた。

その後、一般教育の強化を図る目的から、1952（昭和27）年4月に教育学部と教養部との合併が行われた。これにより教養部の教員はすべて教養学部の所属となった。



**教養部の再設置** さらに教育学部の廃止を受けて、1957（昭和32）年4月1日より、新たに教養部が発足した。その後、1964（昭和39）年に廃止された大阪府立大学農業短期大学の教養部担当教員の移籍などを受けて、教養部の充実が図られた。

ところで、教養部を中心とする基礎系学部新設要求の動きは学内でも活発であったようで、1953（昭和28）年には文理学部設置申請が、1967（昭和42）年には評議会において理学部新設案の審議が行われている。しかしながら、それらの実現は後述の総合科学部設置まで待たなければならなかった。

**総合科学部の設置** 1960年代後半に至り、いわゆる大学紛争の影響を受けて、全国の大学で大学改革への動きが叫ばれる中、学内においても教養教育の見直しが声高に叫ばれることになった。具体的には専門教育と有機的に機能させるべく、教養部の廃止と新学部の設置が提案され、1973（昭和48）年に新学部設立検討委員会が設置された。その後、新学部設立準備委員会等でも討議を重ねた結果、1978（昭和53）年に教養部が廃止され、総合科学部が設置された。当時、国公立大学の中で総合科学部の名称を持つ学部は他に広島大学があるのみで、新設学部として極めてユニークな存在であった。また、設置当初は総合科学科の1学科、日本文化、西洋文化、人間関係、計量化学、物質科学、生命科学の6コースであった。

**工業短期大学の廃止と計測科学コースの設置** その後、大阪府立大学工業短期大学の廃止に関する学内の議論を受けて、総合科学部内に新コースを設置する案が浮上した。検討の結果、工業短期大学部については既述の通り1980（昭和55）年からの学生募集停止が決定され、1982（昭和57）年には、工業短期大学部から移籍した教員を中心とする計測科学コースが総合科学部内に設置された。なお、工業短期大学部については1983（昭和58）年3月31日をもって廃止された。

**大学院の設置と学科の改組** 1982（昭和57）年に大学院総合科学研究科修士課程（文化学専攻、情報科学専攻、物質科学専攻）が設置

され、1993（平成5）年には大学院総合科学研究科の情報科学専攻を数理・情報科学専攻に名称変更するとともに、大学院理学系研究科博士課程（数理・情報科学専攻、物質科学専攻）が設置された。また、1994（平成6）年には大学院人間文化学研究科博士課程が設置された。これらの改編を受けて、2001（平成13）年には大学院総合科学研究科を廃止し、人間文化学研究科と理学系研究科に、それぞれ博士前期課程、博士後期課程を設置し、一貫した研究・教育体制が確立されることになった。

学部については、従来のコースを発展させる目的で、1997（平成9）年に総合科学科の1学科から、人間科学科、総合言語文化学科、数理・情報科学科、物質科学科、自然環境科学科の5学科へと改組された。さらに2001（平成13）年度からは外国語教育の充実を目的とする、言語センターが設置された。

## 第6章 大学通史(3) 大阪女子大学・大阪社会事業短期大学

本章では、大阪府女子専門学校から大阪女子大学に至るまでの流れと、大阪社会事業短期大学から大阪府立大学社会福祉学部に至るまでの流れについて概観する。

### 1. 大阪府女子専門学校

大阪府女子専門学校 1923(大正12)年6月、大阪府に対して山田市郎兵衛(1851〔嘉永4〕年～1927〔昭和2〕年)より、女子高等教育機関設立のための莫大な寄付(土地約6,600㎡、建築費35万円)申出がなされた。これにより大阪府は女子専門学校設置へと動き出し、1924(大正13)年4月、大阪府女子専門学校が設置されるに至った。初代校長は瀧村斐男が就任したが、同窓会の名称である「斐文会」は、この瀧村校長の名前に由来している。大阪府女子専門学校のように、一篤志家による寄付が基盤となって高等教育機関が設置されたという歴史は、極めてユニークなものであるとともに、地域社会と大学との関係を考える上でも重要な示唆を含んでいる。ちなみに、公立女子専門学校の設置は、先述の通り福岡県立女子専門学校に次ぐものである。

大阪府女子専門学校規程第一条には「本校ハ女子ニ高等ノ學術技芸ヲ授ケ兼テ其ノ人格ヲ陶冶スルヲ以テ目的トス」とあり、予科1年と国文国史学科、英文学科、家政理学科の本科3年制からなって



【図8】大阪府女子専門学校・大阪女子大学帝塚山キャンパス

いた。当初は大阪府立阿倍野高等女学校（現在の大阪府立阿倍野高等学校）を仮校舎としていたが、1927年に東成郡住吉村帝塚山（現大阪市住吉区帝塚山）に新学舎が完成されたのを機に移転した。1927（昭和2）年には研究科が設置、翌1928（昭和3）年には専攻科が設置された。なお、予科については1934（昭和9）年に廃止された。

戦時下には、文部省による「女子専門学校教育刷新」が1944（昭和19）年1月に発表されたことを受けて、1944（昭和19）年4月に国語科、経済科、保健科、物理化学科の新学科へと再編が行われるとともに、従来の学科の入学生募集を停止した。なお、戦後の1946（昭和21）年4月には英語科が復活設置されている。

## 2. 大阪女子大学

**大阪女子大学の設置** 1949（昭和24）年4月に、大阪府女子専門学校は大学へと昇格し、大阪女子大学学芸学部が設置された。初代学長には平林治徳大阪府女子専門学校校長が就任した。大学昇格にあたっては浪速大学の母体となる諸専門学校との統合等も検討されたが、関係者の強力な働きかけや、財政的な見地から最終的には単独昇格が認められることになったのである。学科については国文学科、英文学科、社会福祉学科、生活理学科が設置された。生活理学科に関しては後に家政系学科から理学系学科への改組が図られ、1976（昭和51）年4月に基礎理学科が設置された。基礎理学科の設置当時は、公立女子大学の中で唯一「理学士」を授与する学科であった。

**大仙キャンパスへの移転と学科改組** 大阪府女子専門学校以来の校舎を使用し続けていた帝塚山キャンパスの狭隘化は年々深刻化し、学部や学科の充実に対し支障をきたすようになってきた。そこで学内での活発な討議を経て、大阪府立大学農学部の敷地であった堺市大仙町へと移転することになったのである。1976（昭和51）年9月には移転が完了し、同年の後期から新学舎での講義が開始された。

その後、1981（昭和56）年に行われた大阪社会事業短期大学と大



【図9】大阪女子大学大仙キャンパス

阪府立大学との統合（後述）は、社会福祉学分野における大阪府立大学、大阪女子大学両大学の競合問題を生むことになった。その結果、討議の末に社会福祉学科の改組へと進むことになり、1983（昭和58）年4月に人間関係学科（社会学専攻、教育学専攻、心理学専攻）が設置され、1987年3月に社会福祉学科が廃止されるに至ったのである。また新学科については、1989（平成元）年4月に応用数学科が設置され、理科系学科の充実が図られた。

**大学院の設置** 1977（昭和52）年4月に、文科系大学院を先行させる形で大学院文学研究科修士課程（国語学国文学専攻、英語学英米文学専攻、社会福祉学専攻）が設置され、同時に専攻科が廃止された。その後、学科の改組を受けて1990（平成2）年に社会福祉学専攻が廃止されたが、1992年4月には修士課程に人間学専攻が設置されている。一方、理科系大学院については1993（平成5）年4月に、大学院理学研究科修士課程応用数学専攻が設置され、1994年4月には基礎理学専攻が設置された。

**女性学研究センターの設置** 1994（平成6）年の情報センター設置、1997（平成9）年の生涯学習研究センター設置など、1990年代には

各種のセンターが設置され、研究教育の充実が図られた。中でも特筆すべきは1996（平成8）年の女性学研究センターの設置で、同年には大仙キャンパス内に70周年記念ホールも竣工、それまでの大阪女子大学における女性学の研究教育をさらに発展させることになったのである。

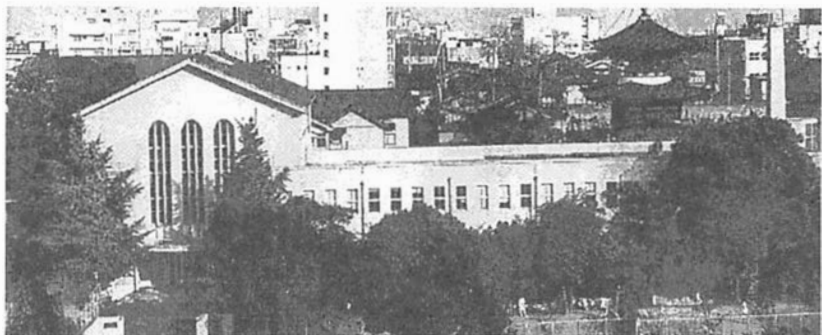
**人文社会学部・理学部の設置** 1999（平成11）年4月には、人文社会学部、理学部の2学部が設置され、学芸学部の学生募集が停止された。人文社会学部は人文学科（日本語日本文学専攻、英語英米文学専攻、国際文化専攻）と人間関係学科が、理学部は環境理学科と応用数学科からなっていた。また、同年には生涯学習研究教育センター（生涯学習研究センターを改組）、上方文化研究センター、情報教育センター（情報センターを改組）も設置された。このようなセンターの中でも、女性学研究センターと上方文化研究センターについては三大学統合後、人間社会学部へと継承されることになった。

### 3. 大阪社会事業短期大学

**大阪社会事業学校** 1947（昭和22）年12月、近畿府県社会事業教育懇談会が、厚生省の要請により開催された。連合国軍総司令部（GHQ）社会福祉課、大阪・京都・奈良・兵庫各軍政部厚生課長の臨席の下、数回の討議を経た結果、社会事業者養成機関設置が必要との結論に達した。

これに基づき、1948（昭和23）年10月、厚生省、大阪府、共同募金等からの出資を得て、財団法人大阪社会事業協会を经营主体とする大阪社会事業学校が大阪市南区田島町（現大阪市中央区谷町）に設置された。

**大阪社会事業短期大学** その後、1949（昭和24）年の学校教育法の改正により短期大学制度が設けられたことを受けて、大阪社会事業学校を母体とし、社会事業科と研究科からなる大阪社会事業短期大学が1950（昭和25）年3月に設置された。校舎は本校を大阪市南区田島町、分校を大阪市東区森之宮西之町（現大阪市中央区法円坂）



【図10】 大阪社会事業短期大学夕陽丘学舎

とし、学長には大阪社会事業学校校長の四宮恭二が任命された。

1952(昭和27)年4月には、大阪府立保母学院を統合して社会事業科保育課程が設置されるとともに産業福祉科が増設、さらに研究科が選科に名称変更された。選科については1956(昭和31)年3月に廃止され、同年、専攻科が設置されている。

1959(昭和34)年8月、キャンパスが大阪市天王寺区夕陽丘町の夕陽丘学舎に移転された。1964(昭和39)年には社会事業科が社会事業専攻と保育専攻の2専攻に分離されることになった。

#### 4. 大阪府立大学社会福祉学部の設置

大学昇格への動き 大阪社会事業短期大学を4年制大学に昇格させる動きは、短期大学発足当時から存在していた。この大学昇格への動きは1970年代に入り活発化し、1976(昭和51)年には社会事業短期大学教授会内に4年制化委員会が発足した。しかしながら、すでに大阪府立大学、大阪女子大学を擁する大阪府にとって、新たな単科大学の設置は困難であったため、討議の末に大阪府立大学との統合による、社会福祉学部設置へと向かうことになったのである。

社会福祉学部の設置 これを受けて1981(昭和56)年には、文部省による設置認可、厚生省からの保母養成施設設置認可を受け、4月に大阪府立大学社会福祉学部が設置された。1987(昭和62)年には夕陽丘から現在の中百舌鳥キャンパスへと移転し、さらに1991(平

成3)年4月、大学院社会福祉学研究科修士課程が設置された。なお、1993(平成5)年には修士課程を博士前期課程とし、新たに大学院社会福祉学研究科博士後期課程が設置されることになった。

社会福祉学部、大学院社会福祉学研究科修士課程は、ともに国公立大学では初めての学部、大学院であり、大学院社会福祉学研究科博士後期課程に至っては、全国初の社会福祉学分野の博士課程であることからもうかがえるように、社会福祉学の分野では極めて先駆的な役割を担ってきたと言えよう。



## 第7章 大学通史(4) 大阪府立看護大学・研究所

本章では、現在の大阪府立大学における看護・医療系学部の淵源と言える大阪府立看護短期大学、大阪府立看護大学の流れと、旧大阪府立大学附属研究所として統合されることになった大阪府立放射線中央研究所の流れについて概観する。

### 1. 大阪府立看護短期大学・大阪府立看護大学

**大阪府立看護短期大学** 1970年代頃から、都市部における看護専門職（当時は看護婦、現在は看護師）不足が社会問題化するようになったが、事情は大阪府においても同様であった。そこで大阪府衛生対策審議会では、1973（昭和48）年12月に看護婦養成の拡充等を主眼とする緊急看護婦充足対策として、具体的な看護短期大学設立提言を含む答申を、知事に対し行った。これを受けて看護短期大学設置への動きが本格化し、翌1974（昭和49）年に大阪府立看護短期大学設立調査会が発足した。

1977（昭和52）年12月には文部大臣から大阪府立看護短期大学の設置認可を経て、1978（昭和53）年4月に、大阪府立看護短期大学が大阪市住吉区の旧大阪女子大学の跡地に開学した。初代学長には山本和男大阪府立羽曳野病院長が就任した。なお開学当時は第一看護科、第二看護科からなっていた。

**大阪府立看護大学** 大阪府立看護短期大学については、開学当初から看護大学整備の方針が決定しており、将来的には看護大学と医療技術短期大学部の併設が目されていた。しかしながら諸般の事情により計画が遅れ、ようやく1989（平成元）年12月になり、大阪府衛生対策審議会において看護大学（医療技術短期大学部併設）構想が了承されるに至ったのである。

1993（平成5）年12月に文部大臣から大阪府立看護大学、医療技術短期大学部の設置認可を経て、1994（平成6）年4月、大阪府立看護短期大学を母体とする大阪府立看護大学が、大阪府立羽曳野病

院に臨接する大阪府羽曳野市はびきのに開学し、看護学部看護学科が設置されることになった。初代学長には曲直部壽夫大阪大学名誉教授が就任した。なお、大阪府立看護短期大学旧校舎（旧大阪女子大学）は、その後大阪府警住吉警察署仮庁舎、大阪府立貿易専門学校校舎などに転用されたが、現在は大阪府公文書館として使用されている。

新校舎は大阪府立看護大学の開学に合わせて1994（平成6）年3月に竣工されたが、建物の設計思想は3G（五臓六腑のG、ジオグラフィカルなG、ジェントルのG）で構成されている。これは看護系大学という性質からくるイメージと、羽曳野の谷状の地形とを生かした曲線的なデザインを勘案したものである。

**医療技術短期大学部の設置** 大阪府立看護短期大学については、大阪府立看護大学医療技術短期大学部へと継承され、第一看護科は看護第一学科、第二看護科は看護第二学科へと名称が変更された。また、1978（昭和53）年設置の大阪府立公衆衛生専門学校が廃止されるのとも関連して、新たに臨床栄養学科、歯科衛生学科、臨床検査学科、理学療法学科、作業療法学科が増設され、全7学科を擁する総合短期大学となった。これは公立医療系短期大学としては大規模な学科数である。

**医療技術短期大学部の廃止** その後、大阪府立大学、大阪女子大学、大阪府立看護大学の三大学統合化の動きと関連して、医療技術短期大学部については廃止の方向で検討がなされることになった。2003（平成15）年4月からは看護第一学科、臨床栄養学科、歯科衛生学科、臨床検査学科、理学療法学科、作業療法学科の入学生募集を停止し、

【表2】大阪府立看護短期大学の卒業生

年度 学科	(名)																
	S53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	111	2	3	4	5	計
第一看護科	-	-	58	61	56	54	63	59	62	61	61	58	65	58	64	65	845
第二看護科	-	54	57	58	62	66	58	60	63	61	64	56	60	59	64	58	900
総計	-	54	115	119	118	120	121	119	125	122	125	114	125	117	128	123	1745

出典（[http://www.nursing.osakafu-u.ac.jp/tan\\_top.html](http://www.nursing.osakafu-u.ac.jp/tan_top.html)）

【表3】大阪府立看護大学医療技術短期大学の卒業生

年度 学科	(名)												計
	H16	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
看護第一学科	59	63	50	54	56	54	54	61	60	50	61	4	626
看護第二学科	60	56	62	61	57	58	58	60	57	60	60	61	710
臨床栄養学科	-	-	17	17	19	13	22	17	16	23	19	-	163
歯科衛生学科	-	18	19	20	20	17	19	21	23	20	1	-	178
臨床検査学科	-	-	17	16	17	19	18	20	18	20	20	-	166
理学療法学科	-	-	12	12	16	12	18	15	12	13	14	1	125
作業療法学科	-	-	9	11	14	15	17	12	12	12	13	4	119
総 計	119	137	186	191	199	188	206	206	198	198	188	70	2086

出典 ([http://www.nursing.osakafu-u.ac.jp/tan\\_top.html](http://www.nursing.osakafu-u.ac.jp/tan_top.html))

さらに三大学が統合した2005（平成17）年4月からは看護第二学科の入学生募集を停止した。2006（平成18）年3月に大阪府立看護大学医療技術短期大学部が廃止となった。

**看護学研究科の設置** 1995（平成7）年7月に、大阪府は健康ビジョン「健康都市・大阪」の実現を支える人材構築を目指すべく、看護専門職の育成を打ち出した。これにより看護教育レベル向上として大学院設置の動きが起こり、1998（平成10）年4月に大学院看護学研究科修士課程が設置された。さらに、2000（平成12）年4月に大学院看護学研究科博士課程が設置された。

**総合リハビリテーション学部の設置** 2003（平成15）年4月に、総合的リハビリテーションを与える人材育成と、教育や研究の体系を構築する必要性から、総合リハビリテーション学部が設置された。リハビリテーションを学部名に掲げている例は、現在私立大学で多く見られるものの、公立大学の中ではほとんど例がなく（学科名では神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部リハビリテーション学科など）、極めてユニークな存在であると言えよう。なお学科は総合リハビリテーション学科の1学科であるが、その下に理学療法学専攻、作業療法学専攻、栄養療法学専攻の3専攻を置いている。

## 2. 大阪府立大学附属研究所・先端科学研究所

大阪府立大学先端科学研究所に至るまで 1950年代の原子力平和利用の高まりを受ける中で、大阪府は1959（昭和34）年に、放射線利用技術の向上を目的とする大阪府立放射線中央研究所を、堺市新家町（現堺市中区学園町）に設置した。その後、大阪府立大学との統合がなされ、1990（平成2）年に大阪府立大学附属研究所として設置された。1992（平成4）年には附属研究所に生物資源開発センターが設置され、1995（平成7）年3月には新本館が完成した。同年4月から大阪府立大学先端科学研究所に名称変更され、新たに12の研究分野（6基幹分野と6協力研究分野）が増設された。先端科学研究所については、後の産学官連携機構へと引き継がれることになる。



【図11】大阪府立放射線中央研究所

## 第8章 大阪府立大学のこれから

本章では、2005（平成17）年4月に発足した公立大学法人大阪府立大学を主軸として、「大学」を学ぶことの意義について改めて言及するとともに、まとめとして、望ましい大学のあり方について検討を試みる。

### 1. 公立大学法人大阪府立大学

大阪府大学改革基本計画 21世紀になり少子化傾向にともなう大学全入化への動きや、行財政改革とも連動した全国的な大学改革の流れが進む中、大阪府においても21世紀にふさわしい大学への改革を進めるべく、外部有識者による「府大学のあり方検討会議」が設置され、2002（平成14）年2月に最終報告がなされた。

大阪府ではこの最終報告等をふまえつつ検討が進められ、パブリックコメント手続き等を経て、同2002（平成14）年12月に「大阪府大学改革基本計画」が策定されることになった。この改革基本計画では、大阪府下に設置されていた三大学（大阪府立大学、大阪女子大学、大阪府立看護大学）の統合再編を骨子とする、以下の新大学構想が提案された。

- ・1つの新生府立大学（仮称）としての展開（現行の3大学を再編統合し、教育研究体制を再構築）
- ・大学院を重視した、高度「研究型」大学として発展（国際競争力のある世界的な教育研究の拠点となるよう、大学院での研究・教育を重視する高度な「研究型」大学として、独創的・先駆的な研究を展開するとともに、複雑化・高度化する社会に対応した「高度専門職業人」を養成）
- ・「新生府立大学法人（仮称）」による自律性・機動性あふれる大学運営の実現（大学の「自主性・自律性」や「機動性・柔軟性」を高めるため、府が直接運営に関わる大学から、「新生府立

## 大学法人（仮称）」による運営へ転換)

公立大学法人大阪府立大学の誕生 その後、大阪府及び三大学関係者による綿密な討議を経て、2003（平成15）年7月には新学部・研究科の構成と理念・特徴を発表、2004（平成16）年2月には新大学の名称が「大阪府立大学」に決定され、2004（平成16）年7月27日に文部科学大臣認可の上、2005（平成17）年4月に新大学「大阪府立大学」が発足した。なお、改革基本計画に盛り込まれていた大学法人化も同時に行われ、ここに正式名称を「公立大学法人大阪府立大学」とする新大学がスタートしたのである。

新大学は、以下の7学部・研究科からなる、公立大学として有数の規模を誇る総合大学の一つとなった。なお、総合リハビリテーション学研究科は、学部の完成年を受けて2007（平成19）年4月に設置された。

工学部・工学研究科

生命環境科学部・生命環境科学研究科

理学部・理学系研究科

経済学部・経済学研究科

人間社会学部・人間社会学研究科

看護学部・看護学研究科

総合リハビリテーション学部・総合リハビリテーション学研究科

総合教育研究機構・産学官連携機構 また、大学発足に際し学部・研究科の他に二つの部局が設置されることになった。一つは総合教育研究機構であり、全学の教養・基礎教育を担う「共通教育部門」と、全学の教育改革と教育研究の成果の地域還元を担う「教育改革・展開部門」からなっており、後者の部門には、全学の教育改革推進を目的とする高等教育開発センターと、公開講座の企画・運営等による地域貢献を担うエクステンション・センターが属している。

もう一つは産学官連携機構であり、先の大阪府立大学先端科学研究所においてなされていた産業技術の高度化や新産業創出といった機能を充実させ、さらには大学に蓄積された知識や技術を積極的に社会還元し、教育研究の活性化を図ることを目的に設置された。なお産学官連携機構には、研究連携戦略室、先端科学イノベーションセンター、リエゾンオフィス、知的財産マネジメントオフィスといった組織が設置されている。

校章とスクールカラー また、開学にあわせて新大学の校章とスクールカラーも制定された。校章は大阪の木である銀杏をモチーフにし、三大学統合をイメージしたデザインとなっている。また、スクールカラーは「ウルトラマリブルー」で、清新なイメージを念頭に置いたものである。

このように、新大学「公立大学法人大阪府立大学」は、世界に通用する「高度研究型大学」としての特性を十分に発揮すべく、研究・教育に従事しているところである。



【図12】大阪府立大学校章

## 2. 大学史に望まれるもの

大学史の意味 以上のように大阪府立大学の沿革について概観したが、公立大学としての特性の一つである、地域社会の期待に即応した大学という大阪府立大学のあり方がうかがえたのではなかろうか。このように大学史は大学のあり方を映し出す機能として極めて興味深い意義をもつのである。研究の最先端を常に志向する立場からす

れば、過去の研究や制度を回顧することなど無意味と思われるかもしれない。しかしながら、ここで温故知新といった格言を持ち出すまでもなく、そういった最先端の研究を産出する「大学」という場の歴史性を認識することは、必ずや研究そのものに歴史の重みを与えることになるだろう。ここでいう歴史の重みとは、時には栄光の歴史であり、時には負の遺産でもあり得る。そうした正負の側面を虚心坦懐に受けとめることにより、社会の中に存在する「大学」というあり方を認識することができるのである。その意味で、大学史は社会におけるアカウンタビリティ（説明報告責任）の機能を果たしていると言えよう。

大学史に望まれるもの それでは、アカウンタビリティの機能としての大学史とはどのようなことを指すのだろうか。

大学史は、大学におけるあらゆる公的文書を網羅的に探索し、精査を重ねた上で編纂される歴史である。それだけに、大学の研究、教育、地域貢献、経営、といったすべての側面に対して目を向ける必要がある。こうした目の向け方は、外部評価や監査に似たものがある。その意味で、大学史編纂作業はアカウンタビリティの機能を持つとも言えるのである。事実、大学史編纂事業にとって大学当局が作成する年次報告書や外部評価書等は、一次資料として利用価値が高い。また、そうした年次報告書や外部評価書の作成にあたって、大学史編纂のスタッフが協力を求められることもある。

さらに大学史は、大学広報上の極めて有効なツールの一つでもある。私立大学の多くでは、大学の伝統を前面に押し出した広報活動を広く行っている。国公立大学の場合でも、例えば大阪大学における懐徳堂や適塾のように、大学の前身機関を効果的に示した例も存在する。今後、大学史は大学広報にとっての重要なキーワードの一つとなってくるだろう。そうした可能性に応えるためにも、大学史編纂事業は、何周年かの記念事業に合わせたような単発的なものではなく、恒久的な営為として組織化されなければならないのである。

図書館等との連携 大学史編纂における必要な第一次資料について



は、文書館等の独立した機構が存在しない場合、どうしても図書館等との綿密な連携が必要となってくる。大阪府立大学では、2005（平成17）年の三大学統合により設置された学術情報センターにおいて、旧三大学の附属図書館を引き継ぎ、さらには情報研究教育機能の展開を行っているが、今後はさらなる連携が必要となってくるだろう。

### 3. 大学文化遺産の構想

大学史編纂研究所について 大学史編纂という事業は、昨今ますます重要視されてきている分野の一つである。ただ、そうした事業においては、全学的な協力体制が不可欠であり、大学が「大学史」というものをどのように位置付けるのかが問われている。具体的には、大学アーカイヴス（文書館）の設置による大学史資料の永年保存を制度的に充実していくことが急務となる。

大阪府立大学においては、2008（平成20）年4月に21世紀科学研究機構における「第2群：戦略的な調査・研究課題を実施するために学長が指定する研究所」の一つとして、バーチャル研究所である大学史編纂研究所が設置され、大学史資料の収集調査にあたっている。なお、大学史編纂研究所の設置趣旨は以下のとおりである。

大学史の編纂事業は、俯瞰的な視点からすれば大学自己点検・評価の作業そのものでもある。また、社会の中で存在する「大学」というあり方のアカウンタビリティを、最も具現化したものと見なすこともできよう。さらに、大学の沿革を詳悉に記録保存することにより、現今の大学のあり方への確認ができるばかりでなく、未来への展望を描く基本的な資料への活用が期待できる。

本研究所は、かかる大学沿革史編纂事業の重要性に鑑み、大学史資料の収集・整理、研究、ならびに大学教育への活用法に対する研究調査を行うべく設置されるものである。

また、大学史編纂研究所では、大学史資料の収集に際し広く地域住民や同窓生への協力を求めるために、ボランティア制度としての「大学史トレジャーハンター（仮称）」を組織するなど、全学的な協力体制を作り上げる工夫を行っている。このようにして収集された大学史資料等については、さらに大学が所蔵する文化的価値の高い物品（文化財・貴重書等）とともに、いわば「大学文化遺産」として整備し、将来的には公開を目的とする博物館機能へと発展させていくことが極めて望ましい。その意味で文書館と博物館とは、大学史にとっては両輪となって機能する重要な部局となってくるだろう。学生生活史をめぐって また、大学史は「大学」のあり方を示すものであることから、ある意味では大学で生活する人々の生活史としての意味を見出すこともできるだろう。研究・教育といった制度からの俯瞰を中心とした大学史が「鳥の目」であるとするならば、例えば学生側からの「虫の目」とでも言うべき視点からの大学史が存在しても、興味深いものになるに違いない。具体的には、授業やクラブ、あるいはアルバイトといったキャンパスライフ（思い出）の聞き取り等を通時的に行っていくことで、その大学の姿が活写されることになると思われる。同窓会誌や卒業アルバムといったものは、この学生生活史の最も重要な資料として位置付けることもできるだろう。当然、これらも「大学文化遺産」の一部をなしている。まさにこうしたところから、大学の「顔」といったものが浮かび上がってくるのではなかろうか。

大学ブランドの創設 昨今、大学の「顔」として具体的な文物をもって示す例が散見される。例えば、大学のマスコットやキャラクター、さらには大学オリジナルの商品などが開発され、商品化も進んでいるようである。これらは大学広報上のメリットとしてだけではなく、大学の「顔」を求めるというユニバーシティアイデンティティの構築とも関係する、重要な営為であると言える。というのも「大学ブランド」として評価を受けるものとして機能するからである。ただし、そうした「大学ブランド」の構築には大学史的裏付けのあ

るものや事業との推進が図られる必要がある。大学とは直接関係のないものを、ただ有名だからと言って借りてきただけでは、その時は耳目を引きつけることがあったとしても、結局は一過性のものに終わってしまい、歴史の中に埋没してしまうだろう。それよりも、派手ではないかも知れないが、大学の中で日夜継続して行われた研究や教育の中で、価値あるものを見出すことの方が極めて有意義である。大学史とは、こうした大学における日々の営為を照らし続ける灯台でなければならないだろう。

## おわりに

以上はなはだ簡単ながら、大阪府立大学史の概観を通して、大学とは何か、大学はいかにあるべきかについて若干の考察を試みた。とりわけ学生諸君にとって、自らが学んでいる大学について真摯に考える契機となることができたならば、筆者としてこれに過ぎたる喜びはない。なお、本書では学部・学科といった研究教育機構の沿革を中心に記述したため、事務局や図書館、さらには学生生活や地域社会との関係についてほとんど言及していない。また、学部附置の研究所、センター等についてもすべてを網羅的に扱うことができなかった。これらの点については、すべて今後の課題であり、本書の不備を改めるべく一層精進を重ねていく所存である。

本書で使用した図版は、特に断りのないもの以外、すべて大阪府立大学広報誌等で使用されたものである。なお、このような大学校舎や学生生活の写真については、大学史編纂事業上貴重な資料でもあることから、広く収集を呼び掛けているところであり、何かお気づきの点があれば是非とも大学史編纂研究所の方までご一報頂ければ幸いである。

最後に、本書が成るにあたって、大阪府立大学21世紀科学研究機構室長の竹本雅美氏には大変お世話になった。記して感謝申し上げたい。

**参考文献** ※年次資料（要覧、学報、評価報告書等）は省略

- 天野郁夫 2006 『大学改革の社会学』玉川大学出版部
- 梅溪昇編 1998 『大阪府の教育史』思文閣出版
- 大阪社会事業短期大学編 1980 『大阪社会事業短期大学創立三十周年記念誌』大阪社会事業短期大学
- 大阪女子大学80年史編纂委員会編 2005 『大阪女子大学 80年の歴史』大阪女子大学
- 大阪市立大学百年史編集委員会編 1983 『大阪市立大学百年史 全学編（上）（下）』大阪市立大学
- 大阪大学五十年史編集実行委員会編 1983 『大阪大学五十年史 通史』大阪大学
- 大阪府教育委員会編 1973 『大阪府教育百年史 第一巻 概説編』大阪府教育委員会
- 大阪府立看護短期大学創立五周年記念誌編集委員会編 1983 『大阪府立看護短期大学創立五周年記念誌』大阪府立看護短期大学
- 大阪府立看護大学看護学部10周年記念実行委員会編 2003 『大阪府立看護大学看護学部10周年記念誌』大阪府立看護大学看護学部
- 大阪府立大学工学部化学工学科創立五十周年記念事業会編 1994 『大阪府立大学工学部化学工学科創立五十周年記念誌』大阪府立大学工学部化学工学科創立50周年記念事業会
- 大阪府立大学工学部機械工学科同窓会編 1998 『大阪府立大学外史 官立大阪工専・大阪府立機械工専・大阪府立淀川工専編』大阪府立大学工学部機械工学科同窓会
- 大阪府立大学社会福祉学部編 1991 『社会福祉学部10年の歩み』大阪府立大学社会福祉学部
- 大阪府立大学獣医学科110周年記念事業会編 1993 『大阪府立大学獣医学科の百十年』大阪府立大学獣医学科110周年記念事業会編
- 大阪府立大学10年史編纂委員会編 1961 『大阪府立大学十年史』

## 大阪府立大学

大阪府立大学総合科学部編 1988 『10年のあゆみ』大阪府立大学  
総合科学部

大阪府立大学人間社会学部記念誌編集委員会編 2008 『大阪府立  
大学社会福祉学部社会福祉学研究科 27年の歩み』大阪府立大  
学社会福祉学部・大阪府立大学社会福祉学部同窓会・大阪府立  
大学社会福祉学会

大阪府立放射線中央研究所編 1989 『大放研三十年の歩み』大阪  
府立放射線中央研究所

学校沿革史研究会編 2008『学校沿革史の研究 総説』（野間教育研  
究所紀要第47集）財団法人野間教育研究所

学術研究フォーラム編 2008 『大学はなぜ必要か』NTT出版  
教育史編纂会編 1938 『明治以降教育制度発達史 第三巻』龍吟  
社

草原克豪 2008 『日本の大学制度－歴史と展望－』弘文堂

堺市教育100年のあゆみ刊行委員会編 1973 『堺市教育100年のあ  
ゆみ』堺市教育100年のあゆみ刊行委員会

作道好男・作道克彦編 1982 『大学の歴史 大阪府立大学工学部』  
教育文化出版

作道好男・作道克彦編 1983 『大学の歴史 大阪府立大学農学部』  
教育文化出版

全国大学史資料協議会編 2005 『日本の大学アーカイヴズ』京都  
大学学術出版会

寺崎昌男 2002 『大学教育の可能性 教養教育・評価・実践』東  
信堂

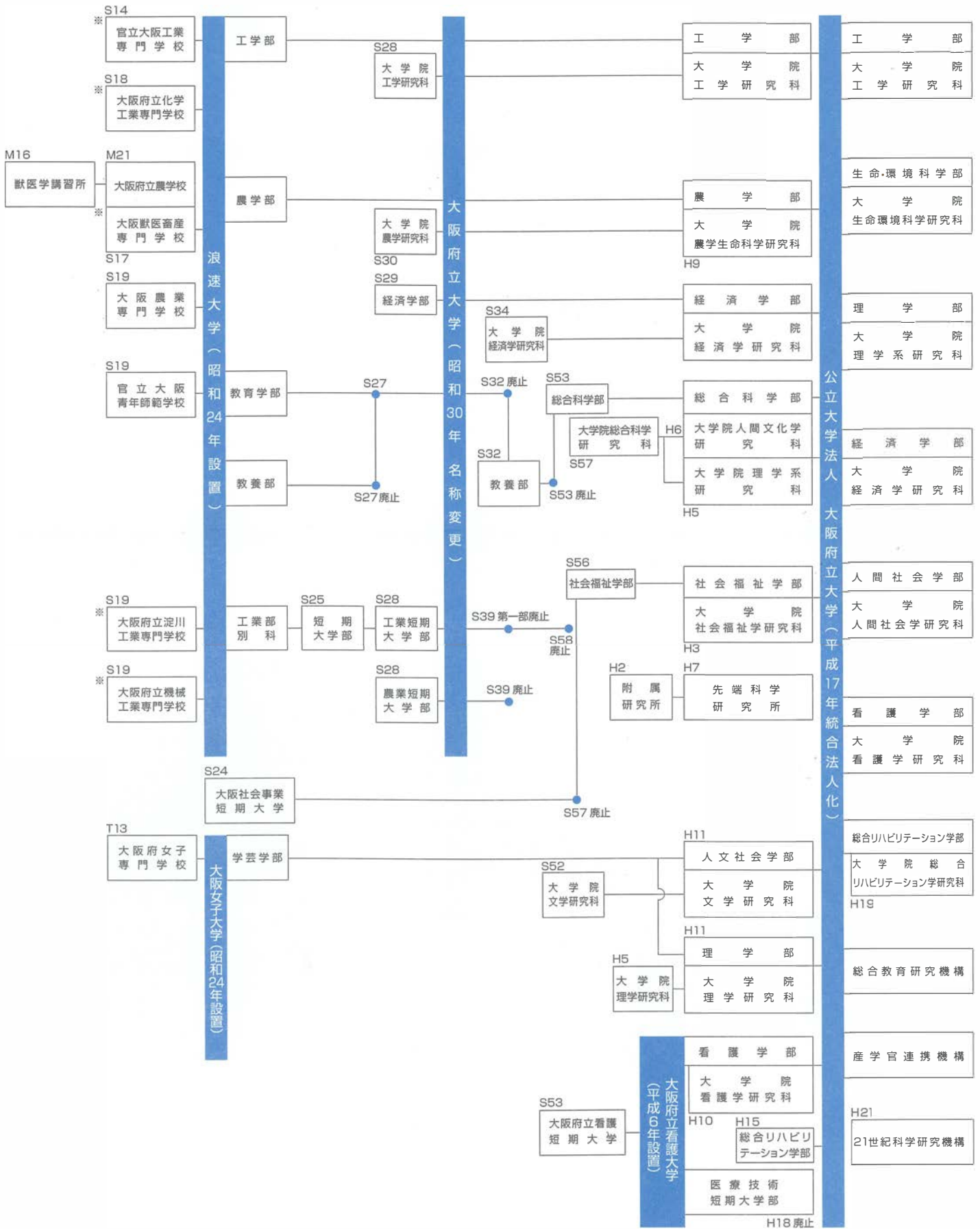
寺崎昌男 2006 『大学は歴史の思想で変わる FD・評価・私学』  
東信堂

寺崎昌男・別府昭郎・中野実編 1999 『大学史をつくる～沿革史  
編集必携～』東信堂

中村洋吉 1980 『獣医学史』養賢堂

- 日本科学者会議・東京高等教育研究所編 1999 『ユネスコ「21世紀に向けての高等教育世界宣言－展望と行動－」および「高等教育における変革と発展のための優先行動の枠組み」』日本科学者会議
- C.H.ハスキンス／青木靖三・三浦常司訳 1970 『大学の起源』法律文化社
- 三好信浩 2005 『日本工業教育発達史の研究』風間書房
- 文部省編 1972 『学制百年史』ぎょうせい
- 文部省編 1992 『学制百二十年史』ぎょうせい

# 大阪府立大学の沿革



※印の校名は浪速大学設置当時のもの

- ・ 大阪高等獣医学学校(S17) → 大阪獣医畜産専門学校(S21)
- ・ 大阪高等工業学校(S14) → 大阪工業専門学校(S19)
- ・ 大阪府立堺高等工業学校(S18) → 大阪府立堺工業専門学校(S21) → 大阪府立化学工業専門学校(S21)
- ・ 大阪府立淀川高等工業学校(S19) → 大阪府立淀川工業専門学校(S21) → 大阪府立電機工業専門学校(S21) → 大阪府立淀川工業専門学校(S21)
- ・ 大阪府立航空高等工業学校(S19) → 大阪府立第三工業専門学校(S20) → 大阪府立機械工業専門学校(S21)





山東 功  
(さんとう・いさお)

【筆者略歴】

大阪府立大学人間社会学部准教授、21世紀科学研究機構大学史  
編纂研究所所長

1970年、大阪府生まれ。2000年、大阪大学大学院文学研究科博士  
後期課程修了。大阪女子大学専任講師を経て、2008年より現職。  
財団法人堺市文化振興財団理事。博士（文学）。

専攻は日本語学、日本思想史。著書に「明治前期日本文典の研究」  
(2002、和泉書院)、「唱歌と国語 明治近代化の装置」(2008、  
講談社)、編著に「国語施策百年史」(2005、文化庁編)などがある。

---

---



#### OMUPの由来

大阪公立大学共同出版会(略称OMUP)は新たな千年紀のスタートとともに大阪南部に位置する5公立大学、すなわち大阪市立大学、大阪府立大学、大阪女子大学、大阪府立看護大学ならびに大阪府立看護大学医療技術短期大学部を構成する教授を中心に設立された学術出版会である。なお府立関係の大学は2005年4月に統合され、本出版会も大阪市立、大阪府立両大学から構成されることになった。

Osaka Municipal Universities Press (OMUP) was established in new millennium as an association for academic publications by professors of five municipal universities, namely Osaka City University, Osaka Prefecture University, Osaka Women's University, Osaka Prefectural College of Nursing and Osaka Prefectural College of Health Sciences that all located in southern part of Osaka. Above prefectural Universities united into OPU on April in 2005. Therefore OMUP is consisted of two Universities, OCU and OPU.

「堺・南大阪地域学」シリーズ 別刊2  
「大学」を学ぶ  
- 大阪府立大学史への誘い -

2009年3月31日 初版第1刷発行

著者 山東 功  
発行者 三田 朝義  
発行所 大阪公立大学共同出版会 (OMUP)  
〒599-8531 大阪府堺市中央区学園町1-1  
大阪府立大学内  
TEL 072(251)6533  
FAX 072(254)9539  
印刷所 有限会社 扶桑印刷社

ISBN978-4-901409-58-2  
C1337 ¥800E



9784901409582

定価：本体価格800円＋税



1921337008004